
夕風にヒグラシ

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕風にヒグラシ

【Nコード】

N8784E

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

少年の日の夏の思い出……小さな冒険と小さな恋。果敢なく過ぎ去る幼い日々は、何時もヒグラシの声に滲んでいる。主人公瀬戸内朋也がちよっとませた、多感な小学生時代を綴る。

第1章 【1】レールの上（前書き）

小学生の6年間は、淡々としてどこか不思議な体験がいっぱい。
淡い気持ちも風のように過ぎ去り、後に残るのはぼんやりとした風
だけ……。

第1章 【1】レールの上

轟音が轟いた。

鐵の車体が、白い蒸気を発して無人駅の傍らを我が物顔で通過する。
くるがね

車輪を廻すカムの軋む音、蒸気を圧縮するシューシューという音が不釣合いに真昼の情景を横切る。

ボクはその時蒸気機関車を初めて見た。

煙突から溢れ出る白い蒸気は、後に長く長く伸びて、ずいぶん時間を得て少しずつ消える。

ボクは無人駅のホームに佇んで、ゆっくりと通り過ぎる鐵を見つめていた。

蒼い空と白い雲が見下ろす殺伐とした風景は、少年の目に焼きついて離れない。

ボクが育った家のすぐ目の前には小さな無人駅が在った。

鬱蒼と茂る雑木に囲まれた国鉄の土地が目の前だったのだ。

歩いても一分。走れば、電車が構内に入ってから家を出ても電車に乗ることが出来た。

当時は柵らしいものも無くて、家の庭の前の空き地を横切ると、雑草を越えて直ぐ古い引込み線があった。

使われていない為、錆、朽ち果て、茶褐色そのもので、その引込み線の先には駅のホームが横たわる。

小さなボクは飛び上がる事はできなかったが、兄はさっそうとジャンプしてホームに飛び上がったりする。

小学一年生頃、学校も早く終わる当時のボクにとって、引込み線の線路は恰好の遊び場だった。

電車が入って来るわけでもないから、親も何も言わなかった。

もちろん、そんな事を言う暇も無く年中忙しく働いていたのだと思う。

電車が走らない線路は朽ち果てている。

枕木は腐り、それを固定する杭もあちこち抜けている。

砂利は全てが錆色にくすんで、刺さった杭も頑張つて引くと、抜けてきた。

それを抜いてはイケナイのかどうかは、当時のボクには解らない。おそらく、だれも困らなかつたのだと思う。

そのうち友達と一緒に遊ぶようになった。

線路では色んな遊びが出来る。

『グリコ』という遊びは全国的なのだろうか……？

ジャンケンで勝った者が『グリコ』『チヨコレイト』『パイナツブル』と歩数を競うものだ。

枕木の並びはその遊びに適していた。

電車なんて通らない場所から遊びに来る連中は、珍しがって喜んだ。

その場所に電車は来ないから、その場所へ入ることに罪悪感などない。柵で囲われてもいないし、何処からが立ち入り禁止なのかも明確な表示などないのだ。

ボクにとってそこは、家の庭の延長に過ぎない。

庭から空き地、そして引込み線の敷地全てが、ボクのものだった。

しかし、保線工事が行われる時期になると、毎年家の前の空き地は線路でイッパイになる。

使用前のレールか、使用済みのレールなのかは判らない。

とにかく家の前の空き地には無数の線路が交互に、ボクの背丈ほど積み上げられた。

一年目は怖くてやり過ごしたが、二年目以降は風変わりな遊び場と化していた。

しっかりと積み上げられたレールは、新たなボクの縄張りだった。普段よりも少し眺めのいい優越感に浸れる場所。

『危険』なんて、当時の遊びには付き物だから、自己責任で身を守るのが当たり前だ。

もちろん、友人たちも同じレールの角で洋服を破いたヤツはいるが、怪我をして血を流した者はいない。

転んで擦り傷を作るのは、何時でもそうだから誰もその親さえも気にはしないのだ。

「ユミ。こっち来いよ」

「待つてよ、ここ歩き難いよ」

色黒でいつもジーパンばかり履いた少年のようなユミと、ボクはよく遊んだ。

線路の向こう側に住んでいるのだが、幼稚園の頃から母親どうしが親しかった為に、ボクたちも自然に仲良くなった。

一度だけユミが積み上げられたレールの隙間に足を挟んで取れなくなった事があった。

「待つて、足。足が取れない」

「なんだよ。トロいなあ」

ボクはそう言いながらも、彼女の足を引っ張る。

「痛いよ」

すっぽりと隙間にハマった足は、中の空間で余裕が在るにも関わらず、その場所から抜き取る事が出来ない。

さすがに焦った。

男っぽいとは言え、ユミは女だ。

スカートなんて履いているのを見た事が無い。

でも……

以前子ども会の海水浴に行った時、着替え中に身体に撒きつけたバスタオルがポロリと外れた事があった。

ユミはたいした焦る様子でもなくて、サラリと外れかけのバス
オルを身体に巻きなおしていた。

その瞬間をたまたま見てしまった僕は、彼女の身体が間違いなく
女で在る事を知っている。

ただ、やっぱり身体も色黒ではあったけど……。

ボクはユミに足の向きを色々変えてみるように指示する。

「取れないね……」

ユミはまるでひと事のように呟いた。

「仕方ない、少し座って考えよう」

ボクはこの事がすぐ後の家で自営業を営む親に知られないか、ド
キドキして落ち着かなかった。

幸い住居が空き地側を向き、店の間口は反対側の通りに面してい
るから、忙しい親には全く気付かれなかった。

でもボクはドキドキしていた。

このままユミの足が永遠にレールの積み上げられた隙間から外れ
なかったらどうしよう。

今日の夕飯は、ユミとここで食べよう。

トイレに行きたいって行ったら、ボクはどうしよう。

ボクは顔を紅くして焦っていた。

しかし、ユミもゆっくりと腰を下ろすと、つま先がピンと伸びた
せいか足がスルリと抜けた。

「あっ、抜けたよ」

ユミは色黒の頬を揺らしてのん気に笑った。

黒髪がふわりと肩に揺れる。

「なんだよ、ビックリさせんなよ」

ボクは安堵の息を零して、半分怒りながら笑った。

「めちゃくちゃ泣きそうだったよ」

ユミが抑^や捺^ゆするようにボクの頬を指で突く。

「そんなんじゃないよ」

よかった……永遠に取れないかと思って、焦った……。

第1章 【2】鉄橋

引込み線を辿っていくと、切り替えレバーの外されたポイント部分がある。本線との切り替えポイントだ。

当然のように、その先に在るのは電車が走る生きた線路だ。

生きた線路は枕木が黒い。

電車から落ちるオイルで、黒光りしているのだ。

いま考えると、何処から落ちるオイルなのか不思議だし、もしオイルを零して走っているとしたら、ちよつと怖い。

しかし、思うにベアリングやグリス系のオイルが車輪やその周辺から飛び散るのだろう。

とにかく生きた線路は、黒く、快々しく輝いていた。

線路の車輪が当たる部分は、常に黒鉄色に磨き上げられて怪しく輝いている。

夏だった。

その線路の先には雑木林が続いていた。

緑の木々に囲まれた中に消え入るように伸びるレールは暑さで歪み、照りつける陽差に陽炎を漂わせて、行き先を揺らしていた。

そこは今いる自分の世界とは違う、果てしなく遠いどこか異世界に通じる魔法のトンネルのようにゆるゆるとうごめく。

ボクはその陽炎の先に行ってみたかった。

夏草が生い茂る緑に囲まれた不思議の世界。

セミが鳴いていた。

家の庭で飼っている犬が、子供を産んだ。

ボクはユミと一緒に仔犬を抱えて線路を歩いた。

抱えた腕の中で、名も無い仔犬がクンクンと鼻を鳴らす。

ボクは白と黒のブチ毛の仔を、ユミは真っ白な綿毛のような仔を気に入っていた。

「ねえ、何処行く?」

同じく胸に抱いた仔犬の小さなふわふわの頭を撫でて、ユミが言った。

「鉄橋まで行こうよ」

「鉄橋?」

「あの先に運河を渡る鉄橋が在るんだ」

ボクは引込み線が本線に交わる手間で、鋼鉄のレールが何処までも延びる先を指差した。

「この先、行けるの?」

「行けるさ。地面は続いている」

腕の中で仔犬がクーンと鳴く。

「でも、電車が来たらどうするの?」

「横に逃げれば大丈夫」

「逃げられなかったら?」

「逃げれるさ」

ユミは仔犬の頭に手を乗せたまま、ボクを見つめていた。

彼女の心配を打ち消すようにボクは

「じゃあさ、次の電車が行ったら直ぐに行こう。1本通れば、暫く来ないだろ」

ユミは小さく頷く。

ボク達はオンボロ小屋のような駅の待合室へ行った。

小さな駅のホームに、ポツリと佇む公衆トイレのような小さな待合室。

時間表を確認すると使われていない引込み線の錆びた線路に腰掛けて、ボク達は電車が通るのを待った。

待合室に留まらなかったのは、どこかやましい悪戯心があって容易く大人に出会うことを拒んだからだと思う。

間も無く急行電車が快々しく通り過ぎる。

ゴツと風が巻き起こり、地面が揺れた。

4両編成のローカル線は、あつと言う間にボクたちの目の前を通り過ぎて小気味よく刻む音が遠ざかってゆく。

「よし、行こう」

ボクはユミを促して黒々とした線路に足を踏み入れると、足早に歩いた。

枕木から枕木へ、足を踏み落とさないようにポンポンと跳ねるようにボクたちは歩く。

まるで枕木から足を踏み外したら地の底へ落ちてしまうかのようになり、きつちり枕木から枕木へ飛び跳ねる。

身体が揺れると、胸に抱いた子犬がフサフサとそれに合わせて揺れた。

真夏の日差しを吸収した鋼の線路は、ボクたちを暑く照り返す。

両脇に木々の生い茂る壁を抜けると、鉄橋が見えた。

「鉄橋だ」

ユミが声をだしてボクを追い越した。

「おい、仔犬気をつけろよ。落とすなよ」

「大丈夫だよ」

ユミが抱いた子犬は、後ろ足をダラリと垂らしてユサユサと揺れていた。

ボクはユミに負けないように、足を踏み出して枕木を跳ぶ。

一瞬仔犬が腕の中で「フギャン」と小さく鳴いた。

鉄橋の上は砂利が敷いていない。

まさしく、枕木以外の場所は下を流れる川面に続いていた。

ボクたちはその手前で立ち止まって下を見下ろした。

「高いね」

ユミは不安を高揚を入り混ぜた不思議な笑みを浮かべて仔犬を抱

きなおした。

線路の二本のレールの間には、細い鉄網が敷かれていた。おそらく作業員などが歩く為の通り道なのだろう。

そして、線路の横にも、人ひとりがかやっと通れるような橋がかかっている。きっと電車が来た時の退避の為だ。

何にしても、もしもの逃げ場が在るのは安心する。

というか、最初から退避通路を渡ればいいのだけれど、ボクらは線路の真ん中を歩き出す。

「下見ると吸い込まれそうだ」

「男の子って、縮んじゃう？」

「な、何が？」

「うつん、なんでもない」

ユミはおかしな笑いを浮かべると、細い鉄網の上で無理やりボクに並ぼうとする。

「ばか、二人同時はヤバイって」

「朋ちゃん、あたしを押さないでよ」

「押すかよ。ていうか、ユミは俺の後ろを歩けよ」

二人の抱く仔犬同士が顔をぶつけて「フゲツ」と潰れた声を出す。

川の水は茶褐色に濁っていて、何かが棲んでいるようには見えなかった。

でも、時折何かが跳ねて川面に波紋を作った。

「あ、魚だよ」

「うそだ」

「本当だよ」

ユミが指をさすと、身体がよじれてボクは思わず鉄網から外れて枕木に足を着いた。

「危ないって」

「本当に魚が跳んだもん」

ユミはそう言ってプツと頬を膨らませると、さつさと歩き出す。
歩く度に鉄網の通路はガシャガシャとしゃしゃって頼りない音を響か
せた。

第1章 【3】ボート小屋

陸橋を渡ると運河の対岸沿いには松林が広がっていた。線路から段差を降りると細い遊歩道が何処かへ続いている。

その小道のもう一方も線路の下に在る洞窟のような細いトンネルを抜けて、これまた二ヨロ二ヨロと何処かへ続く。

誰が通るのか、ひと気は全くなかった。

ボクは小道の先に在る、青い掘つ建て小屋に目を留めると、ユミを促してそこへ向った。

ユミはよいしょと仔犬を抱え直して歩き出す。

彼女の抱く仔犬は、再びユミの腕から後ろ足を零してブラブラさせていた。

トタンの壁で出来た青い掘つ建て小屋にひと気はなかった。

どうやら人が住んだり生活する場所ではないらしい。

小さなドアには鍵がかかっていたが、建物の角にトタンの裂け目が在って中を覗く事が出来る。

小さなボクたちは、難なくそこから侵入できた。

湿った黒い地面はひやりと冷たくて、あちこちの隙間から微かに風が吹き込んでいた。

屋根も所々穴が開いてるし壁も穴や亀裂があり、そこから日の光が注ぎ込んで小屋の中はほの暗い景色だ。

細い光の柱に、ホコリが白く浮かんでちりちりと舞っている。

そして、何より異様なのは無数に置かれた長細い魚のような、でももっと大きな何か。

ボートだ。

丸木で組まれた大きなラックのような物に、沢山ボートが収められている。

海もないのに、どうしてこんな場所に船がこんなに沢山あるのか、ボクは不思議だった。

だいぶ後で知ったことだが、近くの高校のボート部が所有するボートらしく、目の前の運河が彼らの練習場なのだ。

「涼しいね」

ユミは仔犬を地面に下ろして、薄闇に眠るように並ぶボートを眺めた。

仔犬はまだ心もとない足取りでウロウロと一人歩きしている。

「何だろうな、ここ」

「ボートの倉庫？」

「だって、海はずっと向こうだぜ」

ボクは当てずっぽうで港の方を指差す。

「川で乗るんじゃない？」

「こんな川でボートに乗って楽しいか？」

ボクはボートをスポーツとして乗る事を知らなかった。

確かに少し離れた大きな川でもボートに乗れるけど、川幅は運河の4倍は在るし近くに公園もあるきちんとした観光用だった。

「楽しい人もいるんじゃないの？」

ユミは壁際に立てかけてあるオールを撫でる。

河底の淀んだコケの、というかフナの死骸のような臭いがした。

ボクはふと、周囲を見渡す。

「ていうか、犬は？」

「あれ？」

ユミは辺りを見回すと「ここにいたよ」

ボクのつれて来た仔犬は常に手を触れていたが、気付くとユミが下ろした犬がいない。

ユミはこういうところが、やたらうつかりしているんだ。

「バカ、歩いてどこか行っただ」

ボクたちは慌ててボートが積まれたラックの下を覗きこんで探す。

「シロ、シロ」

ユミが勝手に名前を呼ぶ。

「何でシロなんだよ」

「だって、白いから臨時の名前」

「臨時の名前で呼んで出てくるかよ」

「じゃあ、何て呼ぶの？」

「知るか。とにかく見つけろ」

さすがにラックの下は真っ暗で、犬の姿は見つからない。

天井の穴から注ぐ光は、積み上げられたボートに遮られていた。薄暗い中で二人はてんやわんや探し回る。

「外に出ちゃったのかな？」

ユミが泣きそうな顔をした。

「まさか」

よく見ると、ぼろい小屋の壁のあちこちに、仔犬が出てゆけそうな穴ぼこがいくつも開いている。

ボクは不安を打ち消すように、再びボートの下を覗きこんだ。

「どうしよう……ゴメンね朋ちゃん」

ユミはぐすんと鼻をすすった。

「大丈夫だよ」

ボクはそう言いながら彼女の頭を手のひらでポンとたたくと、小屋の外へ足を向けようとした。

クウウウウーン。

どこかで仔犬が鳴いた。

ボクがつれて来た仔犬は今、ユミが抱えている。

どこか遠くで声がした。遠くで、といっても小屋のどこかだ。

「どうしたの？」

振り返ったボクにユミが言う。彼女には聞こえなかったのか？

「今、鳴いたよ」

「うそ？ 何処？」

「シッ」

ボクは彼女の声を制して耳を澄ました。

クウウウウーン。

再び鳴いた。

今度はユミにも聞こえたのか、ボクが声の方へ歩き出すとトコトコ後から付いてきた。

結局一番奥に在るモノ入れが積み重ねられた隙間に入り込んで、出られなくなっていた。

犬って、バツクするのが苦手なようだ……。

二匹の仔犬を抱えてオンボロ小屋の外へ出ると、一瞬景色は白色に霞んで陽射しが眩しかった。

ユミの睫毛はまだ濡れていた。

暗くてよく見えなかったけど、けっこう泣いていたようだ。

ボクは気付かないフリをして

「さあて、帰るか」

「うん」

ユミが身体イッパイに頷いたから、上半身だけ抱えた仔犬の後ろ足がぶらぶらと揺れた。

第1章 【4】ミンミン蝉の声

ボクとユミは二人だけの隠れ家を見つけた。

ボク達にとつて古びたボート小屋は、小さな冒険心をくすぐる絶好の隠れ家的存在だった。

靄の薄つすらとかかる早朝、時には夕映えで燃える空の下、ボクらは陸橋を渡つてボート小屋へ行つた。

何をしていたかというと、別に何もしない。

薄暗い中にただうずくまってヒソヒソと、学校での出来事や友達のこと、スケベな山中先生の事などを話しては、ヒソヒソと笑い合つた。

ヒミツの場所で大笑いは禁物なのだ。

運河に降りて、石投げもした。

ちょうどいい平たい石はいくらでもあつて、飛び跳ねた石が向こう岸に早く着いた方が勝ち。というゲームをやつた。

ユミはボクと遊ぶ事が多いせいか、石投げが上手かった。

枯れ枝の先に小石を差し込んで、浮きを作つたりもした。

小枝の大きさに合わせた小石を、勘で見つけて取り付ける。旨く

バランスが合えば、水面に枝が垂直に立つのだ。

それも、どちらが先に成功するか競つたが、これは何時もボクが勝つた。

そんなある日事件は起きた。

何時ものようにボクとユミがボート小屋にいと、いきなり大きな扉が開きだしたのだ。

ボクらは慌てて奥のものの入れが重なつた影に走りこんで、身を寄せた。

身体を縮こめて、息を潜める。

開いた扉から、白い光がふんだんに溢れこんできた。
人の声と足音。

ボクらは頭を下げて、耳を澄ましていた。

入って来た連中はボクらよりはずっと年上だけど、大人ではなかった。

笑い声が小屋の中に響いた。

ガタガタとボートを取り出す声。

誰かが誰かに命令調で声をかけている。

ボクらは未知の出来事に震えていた。

ユミの身体がボクの身体にピタリとくっついて、お互いが微かに震えてそれを相殺しようとしていた。

何時もは全然気にならないのに、ユミの身体が熱い。

くっついた腕から、彼女が握った手から体温が伝わっていた。

ボート小屋に突然学生が来たのは何故なのか？

いままで上流に在る新しいボート小屋で全員が練習していたらしいが、班分けしてこの小屋のボートを使うことにしたらしい。

もちろん、それを想像できたのは、ボクが高校生になってからの事で、この時はそんな理屈は知らない。

ただ、ユミと身体を寄せ合って息を潜めるだけだった。

実は事件が起こるのはこれからで、ボート小屋に人が来ても別に見つからなければどうと言う事はないわけで……。

「暑いね」

ユミが小声で言った。

確かに暑かった。

ボート小屋の中は黒土の地面でほとんど陽も当たらず、どちらかと言えば冷んやりと心地よい。

しかし、物入れの積み重なった影に隠れていると、妙に暑かった。

狭い場所に二人の体温が融合したからかもしれない。

「うん……」

ボクは声を出す気になれなかった。

小屋の端と端の距離ではあったが、ゴトゴトとボートを引っ張り出す連中の気配と話し声がまだ直ぐソコにあったから。

「ちゅーする？」

「はあ？」

ユミの表情は暗くてよく解らなかったけど、冗談だと思っていた。なんで、そうなるんだよ」

息の多い小声で叫んだ。

ボクとユミの間に注いだ光の細い柱を見つめる。

ホコリがチリチリと光って、上に動いているような下に向かって動いているような……。

「……なんとなく」

「な、なんとなく？」

「うん」

ガタガタとボートが運ばれてゆく。

ボクはチラリと出口付近を見たけど、荷物が邪魔で様子は見えなかった。

頬に何かが当たった。

むにゅっとした、生温かい何か。

ユミの唇だった。

……ああ、ユミの唇って温かいんだ。

ボクは「なにするんだよ」と言えなくて、彼女を見つめた。

ユミはボクがOKを出したのだと思ったのか、今度はボクの唇に顔を近づけ、ボクはかわす暇もなく彼女に唇を奪われた。

唇で受けるユミの唇は、頬の感触とは全然違って、なんだか身体がよけいに熱くなる気がした。

何に例えればいいか判らないほど、やわらかい。

ボート小屋の声と足音が遠ざかる。

ギギツと古い扉が閉められる音が聞こえた。

ボロい壁の隙間から、夏風が通りきる。

ユミはそつと唇を離すと、瞑っていた目を開けた。

ほんの一瞬がやけに長く感じて、ボクは息が続くか心配だったけど、そんな心配は要らなかった。

二人の位置が少しずつれて、ユミの顔を細い光の柱が照らしていた。日焼けした頬がキラキラ光って、ユミは鼻の頭にシワを寄せて笑う。

別に変わりない何時ものユミだ。

でも何故か、ボクは何時ものように視線を交わせなかった。

彼女の目を見れなかった。

ユミはどうしてそんなにボクを見つめるのか解らなかった。

「もう行っただ？」

「えっ？」

「みんな、いなくなっただよね」

「あ、ああ……」

「あたし、おしっこしたい」

「はあ？」

ユミは立ち上がると、ジーンズの後ポケットからポケットティッシュを取り出しながら、小走りにボート小屋を出て行った。

ボクは息切れしそうなほど動悸が激しくなるのを堪えていた。

ボクはわざと時間をかけてボート小屋をでる。

物陰の暗がりになっていた為か、松の木が生い茂る合間を抜ける陽射しが、やたらと眩しく感じた、

裏手には小さな水道があつて、ユミは手を洗っていた。

帰りの鉄橋の上で、ボクたちは手を繋いで歩いた。

どちらともなく手を握って、線路の上を、枕木を跳ぶように並んで歩いた。

緑の木々が風でゆれ、ざわめく。

レールに響くミンミン蝉の声が何故かボクをはやし立てた。胸の奥も、なんだかざわざわと騒がしい。

ボクはぎこちなく枕木に足をのばした。

横目でチラ見したユミはなんだか平気そうで、勝手に鼻歌なんかを歌っていた。

第2章 【1】転校生

小学3年生になると、初めてのクラス替えがあった。

二年間同じクラスで馴染んだ友達と、初めて離れ離れになるのだ。ボクのいた小学校は、ほとんどが3クラス編成だったが、三年生になると同時に4クラスへ増えた。

各クラス40人を限度とし、一人でも増えればクラスが増える仕組みだったらしい。

そして、今までギリギリでバランスをとっていた編成がついに崩れたのだ。

クラスが増える原因となった、いわゆる転校生はボクのクラス、三年三組に招かれた。

「今日から一緒に勉強する、桜井千春さんです」

斉藤先生がそう言った時、程よいざわめきのクラスの中でボクは、彼女の足先から頭のテッペンまでを眺めていた。

きつと他の連中も同じだったと思う。

耳が完全に出ているショートカットに大きな瞳。

赤いチェックのスカートの下には、黒いタイツを履いていた。

広島から来た彼女は、聞き慣れないイントネーションで「よろしくおねがいします」と言った。

東北のちっぽけな町で、これほど目の大きな娘をボクは初めて見た。

長い睫毛がパチパチと瞬きして、千春はまるで瀟洒な館で飼われているネコのような。と、ボクは思った。

休み時間になると、クラスの子は千春の周りに集まる。

まるで動物園のパンダでも見るような、転校生特有の人気という

やつか……。

彼女はとにかく笑顔が大胆だった。

大きな目を細めて笑うその笑顔は、大胆と表現するしかない。ボクも話しかけたかったけど、男子が近づける雰囲気ではまったくなくて、再び一緒になった友人のサトシと共に遠巻きに眺めるだけだった。

ところでボクとユミはクラスが違っていた。

1、2年生の時も違っていたが、今度も別々のクラスだった。

結局ボクとユミは6年間同じ教室へ入る事は無かった。

だから学校ではほとんど口を聞いた事が無い。

クラスも違うのに、男子と女子が廊下で仲良くできるほど当時は開放的でもなかったし、妙な噂のネタになるのも嫌だった。

ユミはどう思っていたか知らないけど、彼女も学校内で話しかけてくる事はなかった。

廊下ですれ違ったりしても、何故かお互いに視線を合わせることもなかった。

クラス替えがあつて転校生が来た新学期初日。

ボクが昇降口を出ると、前には千春が歩いていた。これは非常にラッキーなシチュエーションだった。

ただ、同じクラスの穴戸マリと一緒に歩いている。

ボクは一人で歩いていたら、途中で後にサトシがいる事に気づく。ボクは黙って前の二人を眺めながら歩いているのと同じように、後のサトシは黙ってボクとその前方の二人を眺めていたらしい。

穴戸マリも今回初めて顔を合わせるクラスメイトだったけど、ガリガリに痩せていてあまり興味を引かない。

1、2年でクラスを共にしてした男子連中は骨女とか言ってからかっていたが、別段嫌われているわけでもなく親しみはこもってい

たように思える。

まあ、初日に千春と一緒に帰るあたり、面倒見はいいのだろうけど。

帰りの通学路、丁度中間地点辺に竹林があつて駄菓子売ってる小さな文房具店が在った。

角地に在るためかカドヤという安易な店名で、そこで穴戸マリは角を曲がった。

千春は少しの間立ち止まって彼女に手を振っている。

胸の前で小刻みに振る、その手の振り方がかわいい……。

再び歩き出すとき、千春は後ろのボクとサトシに気付いた。

話しはまだしていないけれど、クラスメイトと言う事は判ったらしい。

彼女はこちらに手こそ振らなかったが、ボクらに遠慮気味な笑顔を向けてから歩き出した。

何メール離れていたか知らないが、その笑顔はそのままボクの胸元まで届いた気がした。

「千春、わかいくな？」

サトシがコソコソとボクに囁く。

「そうか？　なんか、サルみたいじゃね？」

ボクは思わずそう言ってしまった。

耳を出したショートカットは目立つ。目も大きい。サルといっても、ぬいぐるみやイラストでデフォルメされた可愛らしいサルのイメージだけ。

「そんなことねえよ」

サトシはボクに肩をぶつけて言った。

そりゃ、ボクだって同じ事を思っているけど……ていうか、可愛らしいサルだから。声には出さなかった。

間も無くサトシが角を曲がる。

「家、つきとめる」声に出ないような声で、サトシは言う。

ボクは口の動きだけで「ばあか」と言い返して、「じゃあな」と手を上げた。

少しの間、千春とボクは一定間隔を保ったまま歩いた。

千春は小気味よく跳ねるように歩く。

後姿の印象は誰かに似ている。

スカートが揺れる印象はちよつと違うけど、なんとなく誰かに…。

そつだ、背中から元気が漲る後姿はユミに似ているのだ。

でもボクは、この時そんな事には気付かない。

それに気付いたのは、ずっとずっと後の事だった。

「ねえ、何処までついて来るん？」

千春は歩くスピードを緩めて、後を振り返る。

大きな目がクニヤリと歪んで笑っていた。それは、決して嫌がってる言い方ではない。

「オレン家も、こつちだよ」

ボクはいささかぶつきら棒に應える。

ドキリとした。見透かされないように堪えるのは、ハッキリって大変だった。

「ああ、そうなん？　じゃあ、いつしよに帰ろ」

なんという事だ。

彼女の学校では男女が平気で一緒に下校するのだろうか？

広島は、やっぱり都会？

やっぱ、原子爆弾が投下されるだけの都市なのだろう。

ボクの小さな思考がグルグル廻った。

千春はさらに足を緩めて、ボクが追いつくのを待つと並んで歩く。

その時ボクは、何かを一生懸命話した気がするが、何を話したのか全然覚えていない。

ただ、下校通学路に続くひび割れたアスファルトが、何処までも終わらなければいいと思ったのは確かだ。

第2章 【2】なわとび

「家どこ？」

千春がボクに訊いた。

この時、ボクらはボクの家を既に通り過ぎていた。

彼女と離れるのが惜しくて、ボクは自分の家を通り過ぎたのだ。

自営業の食品店の店先に母親がいないかドキドキしながらボクはそこを通り過ぎた。

「もう過ぎた……」

「なんで？」

千春は怪訝に、それでも楽しそうに笑う。

楽しそう……彼女の笑顔がボクにはそう思えた。

「別に……何となく」

ボクは何食わぬ顔で言う。

「千春の家は、何処？」

「この先、もう直ぐよ」

ボクが自分の家を通すぎてまで彼女について来た事を、千春は追及しなかった。

「ここ曲がってすぐ」

彼女が指差した先に、オレンジ色の屋根瓦の白い家が在った。

ボクは黙って千春について行った。

なのに、彼女は拒むどころかあつかましいボクを、玄関を通してくれた。

「チョット待つてな」

千春は小走りに廊下を駆けて階段の上に消えると、ランドセルを置いて直ぐに戻って来た。

「上がった」

「えっ？」

先は予想していなかった。

ボクは何も考えずにただ、千春についてきたのだ。だから、そのまま家に上がることまでは考えていない。

もしかして無意識の計画は、玄関先でちょっと話しをして満足げに帰る。そんな感じだったのかもしれない。

「ほら、せつかく来たんだから遠慮いらんよ」

彼女の広島なまりは、なんだか言い回しが柔らかい。

ボクは「うん」と頷いて、靴を脱いだ。

千春は台所から、麦茶の入ったグラスを二つ持ってくる、茶の間のテーブルに置く。

ボクは自分の手提げ鞆を傍らに置いて、絨毯に腰を下ろした。

みんなと同じランドセルが嫌で、ボクは二年生の後半から手提げ鞆で学校へ通っている。

「お母さんは？」

「ウチは共働きだから、夕方まで一人なんよ」

「そう……」

いま考えると、彼女は淋しかったのかもしれない。

転校初日の複雑な気持ちはボクにはよく解らないけど、少なくとも不安はあったと思う。

それでヘラヘラと懐いた仔犬のようについて来たボクを、彼女は簡単に受け入れてくれたのだろう。

もちろん、初のクラスメイトとして。

「見て見て、カワイイでしょ？」

隣の部屋に消えた千春が戻って来ると、肩には鳥が乗っていた。黄緑色の小鳥だ。

ボクはこの時、手乗りインコと言うものを初めて見た。小さな黒い目がキョロキョロとあちこちを見ている。

「な、カワイイでしょ？」

「う、うん」

ハッキリって、ボクにはよく解らなかった。

犬や猫は可愛いと思うけれど、鳥を可愛いと思った事はない。

それでもボクがそう応える事で、千春が喜ぶ事はボクなりに解っていた。

「飛ぶよ」

千春は、部屋のなかでインコを放った。

黄緑色の小さな物体が、バタバタと忙しく動きながら部屋の中を舞う。

千春は自分で放ったインコを追った。

ボクも何だか分けが解らず追う。

犬と戯れるような、そんな感覚だろうか……？

でも、インコは自分勝手に思いのまま、隙あらばこの部屋から飛び出ようと言わんばかりに羽ばたきまくっている。

それでも暫くすると、千春が延ばした手にインコは帰ってきた。

とりあえず、人に懐くようだ。

「持ってみなよ」

千春がインコを差し出す。

ボクはテレ笑いを浮かべながら、彼女に促されてインコを手に乗せた。

足が硬い……細い指ががっしりとボクの手を掴んでいた。

「可愛いでしょ？」

「う、うん……」

ボクはとりあえず笑う。

千春の笑顔は、こちらの笑顔を誘うのだ。もちろん、手に乗ったインコをどうしていいか判らない困惑の混じったものだったけれど。

「縄跳びする？」

インコを鳥籠に戻してきた千春は、手に縄跳びを持っていた。

広島では男子と縄跳びなんてするのだろうか？　それとも、千春が変わっているのだろうか……。

ボクはユミと縄跳びなんてした事がない。

もちろん、学校の友達や体育の授業ではしているが、女子と二人きりで縄跳びなんて思いもよらなかった。

彼女の当たり前な発言と笑顔に、ボクは再び笑いながら頷いた。

分譲したての場所に建つ千春の家の前は、まだ空き地だった。

彼女は一人で縄跳びを廻して跳び始める。

スカートを揺らしながら飛び跳ねる千春の姿を、ボクはぼんやりと見ていた。

「入りなよ」

千春が誘う。

あの中へ入るというのか？　一人用の縄跳びにふたり入れるのだろうか？

しかし入れと言う千春は、その経験があるのだろうか。

ボクは彼女の飛び跳ねるリズムに乗って、ナワの中へ飛び込んだ。旨くナワを跳び越えた時、千春の顔が目の前にあった。

近すぎて顔全体が見えない。

黒々とした睫毛に覆われた彼女の大きな瞳が、三日月形に笑っている。

足元を見つめる視線が時折ボクの方を向くと、その度に鼓動が跳ね上がる気がして、ボクは一心不乱にナワを跳び越えた。

千春の短い髪の毛が午後の陽射しを浴びながら、彼女のオデコの上でパサリパサリと飛び跳ねていた。

千春の手が、ボクの肩を掴んだ。

彼女の体重の半分がボクの身体にかかる、ボクは反射的に彼女を支えた。

背の順で並ぶと、いつも真ん中より少し前のボクは、決して体格

のいい方ではない。

手足のすらりと長い千春は、丁度ボクと同じくらいの背丈をしていた。

千春の黒い髪の毛がボクの額に微かに触れる。

二人で跳んでいた縄跳びナワに、千春が足を引っ掛けたのだ。

「アハハ、ゴメン」

千春は声を上げて笑いながら、バランスを崩してボクに掴まった。彼女の着ている長Tは、甘いような洗濯洗剤の匂いがした。

その次はボクがナワを引っ掛けてバランスを崩す。

ボクは千春に掴まれなかったけど、逆に彼女の方が手を出して僕を掴まえてくれた。

そんな繰り返しを何度もしながら、それなりに楽しいふたり縄跳びを僕は夕方まで続けた。

家並の向こうで、夕陽がオレンジ色に空を染め始めていた。

第2章 【3】草野球

夏雲が再び旻天に浮かぶ頃、ボクらの胸は心なしかソワソワと微振動し始める。

暑い陽射しが、熱い風が、アスファルトの匂いを運んでくる。

遠くの光を微かに感じ取るセンサーのように、ボクたち子供の心は夏の予感を逸早く感じ取って心躍らせる。

三年生になると男同士で遊ぶ事も増えて、ボクはあまりユミとは遊ばなくなっていた。

時々母親と家に遊びに来たけれど、話しをしたり一緒にテレビを観たりする程度で、外に出かける事は少なくなっていた。

ボクがあまり家にいないせいもあった。

当時クラスごとに仲間連中で作った少年野球チームが流行って、

例外なくボクのクラスも野球チームを作った。

そしてボクもその中にいたからだ。

ボクはあまり野球が好きではなかったのだけれど、18人いる男子の10人以上が参加する野球チームに入らないわけにも行かない。それなりにボクにも社交性が在るというわけだ。

投げる球が速いからと、有耶無耶のうちにピッチャーをやらされていた事も在るかもしれない。

ピッチャーと言えば、やっぱり野球の花形だし。

ただ、ボクはショートバウンドが全然とれないから、内野ゴロの時には全ての球を内野手に任せていて、それはそれで反感を買っていた。

野球の練習は小学校のグラウンドや近くの神社の境内がほとんどだったが、学区ギリギリの場所にある大きな運動公園にも時折足を運んだ。

この運動公園は、本格的少年野球や社会人野球の試合が行われる事もあって、ちゃんとしたマウンドがあった。

初めてマウンドに上がった時、キャッチャーまでの18メートルがやたらと遠く感じたのを覚えている。

野球チームを作ってみんなで練習する事に満足感や達成感を抱いていたボクたちは、ほとんど試合をしなかった。

二組のチームがやたらと強いという噂もあり、自分たちが強いのか弱いのか量るのが嫌だったのかもしれない。

そんなある日、二組との試合が決まった。

日曜日の早朝、大きな運動公園でそれは行われた。

誰もが浮かぬ顔をしながら、「楽勝だぜ」と強がりと言った。

何故二組の野球チームが強いかというと、本格的少年野球チームでプレイしている奴が、二人もチームに加わっているのだ。

地区のリトルリーグは、他の学校も含めて選りすぐりしか参加できない。

同じ学年でそのリーグに入っているのはその二人だけだった。

そしてグラウンドに着くと、ボクはさらに複雑な気持ちになる。

三年二組のベンチにユミがいた。

相変わらずジーパンにTシャツといったボーイッシュな出で立ちがよく似合う。

そうだ、ユミは二組なのだ。

別に自分のクラスの男子を応援するのは当たり前の事で、たいした事ではない。

彼女には彼女の学校での友達関係があるのだ。

それでもボクは、やっぱり気落ちする心を抑え切れなかった。

それが何故なのかも、ぼんやりと霧の中で……。

そろそろプレイボールがかかる頃、ベンチにクラスの女子が現れた。

ベンチと言っても、それこそ木のベンチが数個並んだだけの、青

空ベンチだ。

「これから？」

さおりが駆けて来た。

後に三人いる。

一応キャプテンの後藤ことゴツちゃんが話している。

彼女達はボクらの試合の噂を聞きつけて、よせばいいのに応援に来てくれたらしい。

ピッチング練習をしていたボクは、少し離れた場所で女子たちが近寄ってくるのを見ていた。

そして、後にいる娘に目を留める。

千春がいた。

彼女とは時々、たまたま学校帰りに一緒になると家に遊びに行っていた。

転校初日から続く、微かな絆のようなものかもしれないが、だからと言って教室で親しくしているわけでもない。

ボクの癖かも知れないが、親しい異性とはみんなの前で親しくできないのだ。

周囲の目が気になるというか、向こうが気にするような気がして子供心に気を使ってしまう。

子供らしくないといえば、そうなのかもしれないけれど。

ボクの球を受けるのは、気心したサトシだ。

彼は兄貴が中学で野球をやっているらしく、妙に野球技術に詳しい。

ボクもショートバウンドの取り方などを教わったが、教わってすぐできればみんなが名プレイヤーだ。

とにかく投げる球が速い、ボクはそれだけで充分だった。

「千春来てるじゃん」

しゃがんでボクの球を受けていたサトシが、立ち上がってボクに駆け寄る。

「朋、知ってたか？」

「いや、知らなかった」

サトシの目が輝いた。

いいところを見せてやろうという彼の心内がみえみえだったが、きつとボクの目も輝いていたかもしれない。

早朝の風はまだ心地よく冷たかった。

ボクは初回から全力投球をした。

さすがの2組も最初は面食らっていたようだったが、そう長くは続かない。

3回まで連続三振をとって意気揚々としているのもつかの間、打者が一順するとボクの速球は役に立たなくなった。

ストレートしか投げられないボクの球は、体格のせいも在って軽い。当たればバカみたいに飛んだ。

4番を打つ稲葉がバッターボックスに立ったとき、ボクの球は運動公園の場外へ運ばれてしまう。

ユミは塁を周る稲葉に駆け寄って声をかけていた。

ボクが独り占めしていたと思っていた彼女の笑顔は、当たり前のように誰のものでもない。

彼女自身のものだ。

試合結果は散々。8対3で完敗だった。

負ける事は密かに解っていたが、それをクラスの女子に見られた事がボクらにショックを与えた。

彼女達はボクが三振をとるたびに黄色い歓声を上げていたが、後半は持参したお菓子を食べながら自分たちのお喋りに夢中になっていた。

ボクがチラリと見た千春も、確かにその中にいた。

ヤケクソで投げるボクの速球は、打たれる以外にもフォアボール

で打者を塁にだした。

ゲームセットの時、ベンチに女子の姿は無かった。

第2章 【4】水たまり（前書き）

不本意ながら途中、タイトル変更させていただきました。

『夏の瀬』ではないか？ というご指摘をいただきました（^^；
たしかに…ただ、電子広辞苑で調べたら、年の瀬と言っても、夏の瀬とは常用ではないようです…。

『夏の背』という言葉はどこで見かけた気がして、文字列が気に入っていたのですが…

それでもご指摘されると確かに『やつぱ夏の瀬か』…と、一般に違和感があるようなので、いっそのこと語句を変更する事をご了承下さい。

内容は『夏の背にヒグラシ』の続きです。

第2章 【4】水たまり

雨が降っていた。

いつもの通学路も、淡く滲んだ景色にアスファルトのグレーが煙るように霞んでいる。

雨の日はただでさえ学校へ行くのが憂鬱なのに、昨日の今日でその心の沈み具合は尚更だった。

負けるのは判っていた。みんなそうだったと思う。

ある意味、負けっぷりを楽しむ予定だったのだ。

その中で、自分たちがどれ程のものか、さりげなく量りにかければいい事なのだ。

しかし、クラスの女子が試合を応援に来て、負けっぷりにシラけて途中で帰ってしまった。

それが、試合に負ける事以上にボクたち男子のプライドをズタズタにした。

その中に桜井千春がいた事で、ボクとサトシは完全に落胆していた。

傘の触先から激しく雫が滴り落ちるのを見つめながら、ボクは何時もより重い足取りであるく。

路面は全てが水溜りのようで、スニーカーがジャブジャブと雨水を踏みつける。

側溝から溢れた雨水が小さな川を作っていた。

ボクはそれに気付かず足を踏み出して、足首まで水に浸かってしまった。

背中できすりと笑い声がした。

聞き覚えのある声だった。

ボクはゆっくりと振り返る。

「ちゃんと、足元見てあるきなよ」

相変わらず風変わりなイントネーションで千春が言った。

「見えなかったんだよ」

思わずボクは言い返す。

立ち止まったボクに、千春は並んだ。

学校へ行くときに一緒に歩くのは初めてだった。

前を歩く彼女はよく見かけられるけど、もちろんボクは声なんてかけない。

下校時間に比べて、周囲には登校中の他の生徒が沢山いるし、何処にクラスメイトがいるかも判らないから。

一瞬並んでボクは、千春の一步前に出た。

千春はほんの少し小走りに再びボクに並ぶ。

「昨日は面白かったね」

彼女は登校中であろうと、男子と並んで歩く事に抵抗はないようだ。

「ボロ負けが？」

「違うよ。野球を間近で見るの初めてだったし、朋ってボール投げるのうまいんだね」

千春は赤いチェックの傘を揺らして屈託なく笑う。

昨日途中でいなくなったくせに、どうしてそんな笑顔で昨日の試合を語るんだろう。

ボクの名前は瀬戸内朋也^{せとうち とも}で、彼女は先日まで瀬戸内くんと呼んでいた。

なのに、この朝彼女はさりげなくみんなが呼ぶようにボクを『トモ』と呼んだ。

素早く反応しそうになったけど、気付かないふりをした。

「でも、とるの下手だけどね」

「アハハ、エラーもしてたね」

千春はボクの腕に手を伸ばして触れた。

悪気のない言い方と仕草は理解できたが、やっぱり心の何処かがチクリと疼いた。

「でも、カッコよかったよ」

「最後まで観てないくせに」

相変わらず雨音が傘を叩いていた。

二人分の雨音は、喧騒となってボクと千春を包み込む。

「観てたよ」

ボクは彼女を振り返る。

「観てたよ。あたし、途中でミカちゃんたちと別れて戻ったの。でも何だか一人でベンチにいるのもなんだし、グラウンドの入り口で観てた」

千春は引き返して、試合を最後まで観てたらしい。

「9回も、三振ひとつとってたじゃん」

その通りだ。

ボクは渾身の低めギリギリストレートで、3番バッターから三振を取っている。その後、再び4番にホームランを打たれたけれど……。

校門の隅にも多きな水溜りが出来ていた。

大雨の時は何時もこうで、水はけが悪い立地は有名ならしい。ボクが遠回りしようとするのと千春はボクの腕を再び掴んだ。

「跳んで」

「はあ？」

「跳んじゃお」

別に跳べないほど大きな水溜りでもないけれど、何だか無駄な行為に感じた。

それでもボクは校門前の大きな水溜りをパツと跳び越えた。傘が風に煽られて、雨が顔を叩く。

千春は小走りに水溜りを回避すると、ボクの腕を掴んで

「スゴイスゴイ。本当に跳べたね。凄いじゃん」

確かに思いの外ギリギリだった。

「行こ」

千春が目の前の昇降口へ促す。

ボクは何だかわけが判らずに彼女の後を追った。

今考えると、彼女はボクを褒めたかったのかもしれない。

ただそれだけだった気がする。

昇降口を入ると、ユミが内履きに履き替えているところだった。

雨の日の昇降口は、いささがざわめいている。

ボクはその喧騒に紛れてユミをかわそうとしたけれど、何かを感じたテレパシスのように、彼女はボクを振り返った。

目が合った。

けれども、ボクは視線をそらしてわざと千春に話しかけた。

「俺の球速いだろ」

「えっ？」

「俺の投げる球さ。速くね？ 向こうも面食らってたし」

「う、うん。よく判らないけど、そうよね」

ボクはせわしなく会話が途切れないようにして、千春と廊下を歩いて階段へ向った。

ユミの姿が見えない場所まで来ると、ボクは走って階段を駆け上がり教室まで向った。

昨日の試合でユミが稲葉と親しげにしていた事がボクの心に引っ掛かっているのか、それとも今千春と一緒にだった事に疚しさを感じるのか自分でも判らない。

ボクはとんだ捻くれ者なんだ。

第2章 【5】夕暮れ

学校から帰ると、茶の間にユミのお母さんの姿が見えた。

ボクの母親と一緒にお茶を啜って笑っている。

食品店の午後は夕方まで比較的暇で、この時間によく休憩をとっている。手伝いに来ているパートさんも一緒にお茶をしたり、自宅へ一度帰ったりする。

少し開いた障子戸の隙間から「お帰り」の声がした。

ボクは愛想もなく「ただいま」と言うと、ちらりと茶の間を覗く。ユミの姿は無かった。

あの野球の試合以来、ユミとはまったく会話を交わしていない。階段を上ろうとした時、トイレのある奥の廊下からユミが現れた。ボクは一瞬立ち止まったが、直ぐに階段に足を上げる。

「元気？」

背中からユミの声がした。

ボクは階段の半ばから「ああ」と声を返す。

ユミは階段を少しだけ上って来た。

「あの娘、転校生でしょ？」

千春のことだと、すぐに判った。

「ああ、そつだよ」

「仲いいんだ」

「別に」

ボクはユミの言葉に少しだけ不機嫌になる。

階段の一番上で僕が振り返ると、ユミもすぐ傍まで上がってきていた。

「稲葉と仲いいの？」

「普通」

「ナンだよ、普通って」

「普通はフツウだよ」

ユミは頬を膨らませて、口を尖らせる。

「千春と仲いいの？」ユミが言い返す。

「お前が千春とか言うな」

「だって千春でしょ。転校生」

「知らないくせに、千春って言うなよ」

ユミは口を尖らせたまま

「千春、千春、千春、千春、千春！」

何度もそう叫ぶと、階段を駆け下りて行った。

ユミが下りて行った後の茶の間から、「あんた何叫んでたの？」という、彼女の母親の声が微かに聞こえてきた。

ボクは自分が思っていた以上に無神経で、その頃のボクは自己中心的だったと思う。

学校ではプール開きも終わって体育の時間はほとんど水泳になり、校庭に出ると風に乗って塩素カリウム臭の匂いが漂う。

プール脇の林から、蒼い空へ向って蝉の鳴き声が響く。

もう夏も本番だ。

その日は夕方遅く、ユミの母親がウチへ来ていた。

忙しい合間をぬってボクの母親が何か話を聞いている。

ウチにはお店を手伝うパートさんが二人いるが、以前ユミの母親もウチで働いていた。

茶の間でお茶を一杯飲むと、ユミの母親はテレビを観ていたボクに

「今日、学校でユミを見かけた？」

ボクは首を横に振った。

同じ学校の隣のクラスだけれど、構内でユミを見かける事は本当に稀なのだ。

「ユミが友達のところ以外で行きそうな場所知らない？」

ボクは再び首を横に振ると「なんで？」

「うっん。ちよつとね」

少しして、ユミの母親は何処かへ出かけて行った。

ボクが再びテレビを観ていると、店と茶の間の敷居から今度は母親が声をかけてきた。

「トモ、ユミの行きそうな場所知らない？」

「知らない。なんで？」

母親は忙しく茶の間に上がってくると、ユミの家の事情を簡単に話した。

彼女の家は父親が単身赴任していると聞いていた。が、どうやらただの別居だったらしい。

そして、昨日正式に離婚が決まったのだ。

離婚というと、父親と母親のどちらかが他人になるという事だ。どちらか片親になると。いう事だ

ボクはそんな臆な認識を頭に巡らせた。

ユミはそれを知った昨夜から様子が変で、学校からもまだ帰ってないらしい。

「遊びに行くときも、必ず鞆を家に置いて出かけるそうだよ」
その通りだ。

ユミがランドセルを背負ったまま寄り道するのはボクの家くらいで、それ以外は必ず一度家に帰ると聞いたことが在る。

夕方まで働いている母親が心配しないように、何処へ行くかメモ書きを残すそうだ。

もちろん、当時携帯電話などと言う便利ツールは無い。

そのユミが連絡もなくまだ家には帰っていないという。

6時50分から毎日放映している、ドラえもんの再放送番組が終わったところだった。

おそらくクラスメイトの家は、既にユミの母親が検索済みだろう。だからボクに「他」と訊いて来たのだ。

他？

ボクは何故かピンときた。

ボクが想像する場所に、彼女がいるような気がした。

誰も知らない誰も探せないヒミツの場所……。

兄貴の大型マグライトを手に、ボクは家を飛び出した。

だいぶ陽の長くなった最近だけど、夕暮れが緋色の空を暗く燈していた。

第2章 【6】手のひら

ユミの家が在るのは踏み切りの向こう側で、ボクの家の前駅から線路に沿って道路を歩くと直ぐに踏切が在る。

その踏切を渡って線路沿いに戻るように、ちょうど駅を挟んでぐるりと道なりに回りこんでから路地を奥へ入ると彼女の家は在った。コンクリートブロックを積み重ねたような灰色の四角い家だった。何度か遊びに行った事があるけれど、父親のモノだというアルトサックスがユミの部屋に置いてあって、吹こうとしたら彼女に怒られた事がある。

いま考えると、それだけ父親のモノを大切にしていたという事だ。おそらくユミは、不在である父親に親しみを感じている。もしかしたら、毎日顔を合わせるボクよりも、父親を大切に思っているのかもしれない。

毎月第3日曜日に父親が帰ってきて、その日だけ父親と一緒に食事をする、以前ユミが言っていた事が在る。

ボクは単身赴任とやらから帰宅しているのだと思っていたけれど（たぶん、ユミもそう思っていた）、おそらく別居宅からユミに逢いに来るのだ。

当たり前のように父親が傍にいるボクには、彼女の心理の全ては判らないし、性別も違うからその想いも判らない。

でも、ユミはきつとヒミツの隠れ家にそつと影を潜めているに違いない。

鉄橋を渡る頃には、だいぶ辺りが暗くなっていた。

緑の茂みは黒々と姿を変えてボクに覆いかぶさるうとしている。

こんなに速く駆け抜けた事はないというスピードで、鉄橋の中央に敷かれた網を渡った。

ガシャガシャという網の震える音が、背中からボクを追いかける

ように聞こえた。

黒く聳える松林の遊歩道を抜ける頃、ボクは手に持っていたマグライトを点ける。

白い光が湿った黒い土の歩道を照らす。

正面に黒い建物が見えたのでライトを正面へ向けると、青い古ぼけた建物が光の中に浮かんだ。

去年の夏、幾度となくユミと来たボクたちだけのヒミツの隠れ家。彼女の唇を感じた、古びたポート小屋にボクは来ていた。

相変わらずボロで、壊れたトタン壁の隙間も健在だった。

マグライトで小屋の中を照らすと、直ぐに人影が見えた。

小さくて、仔犬のようにうずくまった人影が誰なのか、ボクには直ぐに判った。

「ユミ、いるのか？」

とりあえず声をかけてから、ボクは小屋の中へ足を踏み入れる。

返事は無かった。

フラッシュライトの明かりが、小さく丸まった影を照らし出す。

「ユミ、何してんだ？ みんな探してるぞ」

ユミは膝を抱えてそこに頭を着けた状態で、微動だにしない。

足先がちよつとだけでもぞもぞと動いたのを見て、ボクは彼女の隣に腰を下ろした。

どのくらいそうしていただろう。

ボクはユミの隣で黙ったまま、ただ座ってフラッシュライトが照らすボロい天井を見上げていた。

何かを言おうとしたけれど、何となく言葉が探せなくて、ただ傍にいた。

ボクの親は昔から共働きで、父親は山の向こうの隣町へ車で食料品を売りに行っていた。

新しい道路開発の事業者や、広がる部落集で食料品は飛ぶように売れたらしい。

母親は自宅と繋がる店にいたけれど、姿は見えるが相手をしてもらう事は少なかった。

幼稚園に通うようになったボクは幼稚園バスで送り迎えされていたが、バスの止まる踏み切りの向こうまで歩いてゆく必要があった。どの園児も母親が付き添いで送り迎えをしていたが、ボクは何時も一人だった。

そんな頃、ユミの母親はウチのパート募集に来た。

色黒で小さなユミを連れて来た日の事はボクも覚えている。

長い髪の毛にサロペット姿の彼女は、キョロキョロとボクの家とボクを見渡して笑った。

明るい子なのだと、子供心にボクは感じた。

ユミには三才上の姉がいるが、そっちは滅多にウチへ来ない。社交的なユミに対して、どこか内向的なところが在る姉のミキは、家で読書するのが趣味らしい。

母親にくつついて来るのは何時もユミで、幼稚園は違っていたけれど徒歩で通う保育園の帰りに直接、ユミは母親のいるウチへ寄っていた。

ユミのお母さんや他のパートさんが帰った後も、ボクの母親は店で仕事が残っていた。

何時も視界に入る母親は何時でも忙しくて、滅多に構ってもらえなかった。

ユミにとって、父親はそんな存在かもしれない。

彼女の場合、視界にさえもなかなか入らなかった父親……それが、もしかしたら永遠に会えなくなる存在になるかもしれない。

ボクは膝を抱え込んだまま動かないユミの左手に自分の手を乗せた。

小学校三年生のボクに、その時かける言葉なんて思いつくはずも無い。

ユミの右手が僕の手にかぶさり、強く握られた。

冷たい手のひらが、ボクの手の甲を包み込む。

そのまま暫く、ボクらはただ沈黙したまま時を過ごした。

砂嵐が通り過ぎるのを静かに待つ、砂漠のジプシーのように……。

第3章 【1】しぐれ

古い引込み線の脇には、昔使用したらしい国鉄の作業小屋が何軒か並んでいた。

まるで枕木を柱に使ったような真つ黒に朽ちた木造の建物で、今で言うプレハブ小屋のようなものだった。

もちろん使われなくなってからだいぶ経つらしく、誰かが出入りしている様子は無い。

中の部屋は三つに区切られて、机や棚、ロッカーらしいしきモノがまだ残っていた。壁には作業着やヘルメットがかけられたまま、時間だけが何時の間にか経過してしまつたように見える。

気付かないうちに過ぎてしまつたようなその時間の姿が、ボクの興味をそそつた。

ただ、ガラス窓越しに中を覗く事は出来ても、頑丈に施錠された扉からは中へ入る事は出きない。

さすがにガラスを割って入り込むような悪事を働くつもりもない。その後に建つ物置らしきボロ小屋は中へ入れたけれど、中はどうでボクの興味をそそるものは無かつた。

小学四年生の夏休み初日は雨だった。

朝からしとしとと雑木を湿らすような霧雨だった。

ボクは久しぶりに引込み線周辺をぶらぶらと歩いてみる。

ひと気のない無人駅と何も動かない古い引込み線。

朽ちた敷石が雨に濡れて、てらてらと光っている。

サトシや他の仲間と学校のプールへ行く約束をしていたけれど、この天気でそれも中止になったボクは、いささか暇を持て余していた。

まさか、夏休み初日から宿題に手を付けるバカもいないだろう。

雑草のかげから見た国鉄の作業小屋は、霧雨に浮かぶ古い難破船

の如く黒く霞んでいた。

建物自体が生い茂る雑草に半分埋まって、窓は黒々とした景色を映し出し、僅かな景色の光を反射している。

その時だった。

窓に人影が見えた。

ボクは目を見張った。

あの建物は、誰も出入りしていないはずだ。

その人影は、一瞬窓を横切って直ぐに消えた。

以前兄に妙な噂を聞いたことが在る。

この駅を作った当時、引込み線の脱線事故で複数の人が亡くなったそうで、その亡霊が古い小屋に捕り付いている。

確かボクがまだ幼稚園で、兄貴はちょうどボクくらいの歳の頃だ。まさか……。

確かめたいけれど、足がすくんで前には出られなかった。

湿った風がひゅうつと吹いて、草木をさわさわと揺らした。

ボクは踵を返し、伸びきった雑草を掻き分けて家に帰る。

部屋に戻ってアレがナンだったのか考えた。

考えた。

何も思い浮かばない。

だって、あの建物の扉のカギは古く錆びて誰も開け閉めした形跡なんてないのだ。

今日だけ誰が入ったのだろうか？

いや、ボクは遠目にも扉の大きな南京錠がかけられたままなのを確認したんだ。

だから、あそこに人がいる事はありません……。

「ねえ、トモ。あそこの小屋に誰かいらない？」

翌日、小学校のプールで出合ったユミが言った。

サトシとゴツちゃんと一緒に午前中にプールに来たボクは、目を洗う水道場に一人でいたらユミに声をかけられたのだ。

昔のプールは塩素消毒剤が強いのか、しょっちゅう目を洗わないと直ぐに痛くなった。

だからと言って、ゴーグルを着ける事は禁止されていた。

「はあ？」

最初ボクは、『あ的小屋』の意味が判らなくて、振り返りざまに変な声で応える。

「ほら、駅の近くにボロい小屋があるでしょ」

ユミが、Uの字に上に向って飛び出た蛇口に顔を近づける。

「ああ、あ的小屋」

前屈みになったユミの背中に、ボクは声を返した。黒い肌に肩甲骨が盛り上がっている。

密着したスクール水着の背中中央には、ゴツゴツとした背骨が浮き上がった。

「何で？」

ボクは彼女のうつすらと産毛の生えた背中を見つめたまま問いかける。

「うん……なんとなく」

ユミは片目ずつ目を洗いながら言葉を返した。

以外に器用な事をするもんだ。

「なんとなくって？」

「誰かいたように見えた」

ユミが顔を上げて、バスタオルで目の周りを拭いた。

「何時見た？」

「この前」

「この前って？」

「この前はこの前だよ」

ユミは時折一人であの辺りを歩くのだろうか？

ボクはふと考えた。

彼女はボクと一緒にの時だけ駅周辺で遊んだりすると思っていたけれど、ひとりでもぶらぶら歩く事があるのだろうか？

「一人で？」

背中を高らかな笑い声が通り過ぎると、ボクがひやかされているかと思つて少しだけ意識した。

「いいじゃん。別に一人で歩いたって」

「別に、悪くはないけど」

やっぱりそうだ。

ユミはボクと同じように、あの引込み線周辺の閑散とした景色の中を、独りでぶらぶらする事があるのだ。

「それよりさ、あそこカギ付いてたよね？」

ユミは目を洗いに來た他の誰かに場所を譲るようにして、その場を数歩さがる。

ボクもそれに合わせて、後へ足を運んだ。

ピーツと笛の音が響く。

來場人数が多い日は、奇数学年と偶数学年が交代で交互にプールへ入る。

その入れ替え時間を知らせる笛の音だった。

隣接した茂みから聞こえる蝉の声に混ざつて、人のざわめきが周囲を取り巻いた。

明らかに学年の違う人波に、ボクたちは話を続ける。

「あたしカギかかつてるの見たんだ。でも、中に誰かいたよ」

ユミは少し訝しげに笑った。

前髪を上げたオデコに、三本小さなシワがよる。

きつとあの人影だ。

ボクが見た人影と、ユミが見た人影は一緒なのだろうか……？

陽射しが注ぐ肩がジリジリと暑さを感じているはずなのに、何故かボクは背中に冷たい電気を感じて身震いするのを抑えた。

黒髪を二つに束ねたユミの顔は、陽に焼けて真っ黒だった。

第3章 【2】夏の香り

「口さけ女かな？」

サトシは腹が痛くなったと言って先に帰り、ゴツちゃんは父親が迎えに来てそのままバツティングセンターへ行った。

ボクは初めて、学校から帰る道筋をユミとふたりで歩いていた。アスファルトから溢れ出る熱にほだされる中で、ユミが言ったんだ。

それは今年になって急激に噂の広まった口さけ女という、なんだか判らない人型の何からしい。

「そんなわけないよ」

ボクは思わず笑ってしまったが、もしかしてそうなのか？ とも思った。

周囲の人々に追い詰められて、あのボロ小屋に逃げ込んでいるのかもしれない。

妖怪なのかなんなのかわからない口さけ女なら、鍵のかかっている部屋にも入れるような気がした。

ユミは濡れた水着の入ったビニールバックをぶらぶらと大きく揺らして

「だって、普通の人間じゃないよ。きっと」

「かもね」

陽射しが目に入って、ボクは目を細める。

「ねえ、行ってみようか？」

「行くって？」

「ボロ小屋」

ユミはまだ湿った黒髪をかき上げる。ボクの短い髪の毛は、もう完全に乾いてパサパサになっていた。

「だって、誰か住んでたらどうする？」

「トモ怖いんだ」

「別に怖くはないけどさ……」

「じゃあさ、行ってみよう」

ユミはそう言っただけでバックを持ち直すと「お昼どうする？」

ボクは家には帰らず踏み切りを渡って、ユミの家に向った。

誰もいないから一緒にお昼を食べようと言っただけだ。

ボクは何となく彼女に促されるまま、久しぶりにユミの家に向った。

玄関にはミキの物と思われる靴がある。

「ミキ、いるの？」

「たぶん」

ユミは自分のサンダルを脱ぎながら「でも、どっちでも変わんないよ」

それもそうだ。

ミキは部屋で読書をしていると、ほとんど外へは出ない。

誰もいないと言った中に、もともと姉のミキは入っていないのだ。と言っても、他は母親しかいないのだけれど。

ボクは茶の間に腰掛けてテレビを観ていた。

台所でユミが冷やし中華を作っている。まな板をたたく音はきくと、ハムを刻んでいるのだろう。

ボクたちは昼のバラエティー番組を観ながらズルズルと冷やし中華をすすめる。

「ミキの分は？」

「声かけといた」

とりあえず姉の分も作ったらしい。

ボクは台所の奥に通じる廊下をそっと覗いてみた。人の気配はない。

蝉の声だけが、家全体を包み込んでいた。

扇風機の風が心地よかった。

スイカを一切れ食べて、ボクは何時の間にかウトウトと寝入っていた。

茶の間の窓からカーテンを揺らす風が、穂のかに熱い。

目を覚ますと扇風機の角度が変えられて、ボクに直接風が当たらないようになっていた。

ユミが気を利かせてくれたのだろうか。

ふと台所を見ると、ミキがお昼を食べている。

正確に言つと、食べ終わってボクの方をちょうど見たところだった。

それとも、暫く前からボクを見ていたのだろうか？

「おはよう」

ミキがおつとりと微笑む。

「えっ？」

彼女の冗談に、半分寝ぼけたボクはただ瞬きをするだけだ。

ボクはミキと仲が悪いわけではない。

以前ここへ来た時も意外と話しているし、近所の文房具店であった時も笑顔で言葉を交わしている。

何時の事だかあんまり覚えてないけれど。

ミキは茶の間へ入ってボクに近づくと

「よく寝てたね。プール疲れるでしょ？」

「疲れるけど、楽しいよ」

「そう」

ミキがボクの傍にペタリと腰を下ろしながら言った。

壁に寄りかかって、息をつくと再びボクを見てほんわかと微笑む。ボクは彼女のほわほわした笑顔が嫌いではない。

何だか普通の人と生きている次元が違うと言つか、どこか違う世界にいる人みたいなのだ。

何時も本を読んでいるミキは、複数の世界を行ったり来たりしているのかもしれない。

ただ、今年中学一年生になった彼女は、ずいぶんお姉さんになったように感じる。

ショートカットの横髪が、後ろに向かってキレイに流れを作っているせいだろうか。

「ユミは？」

「さあ」

ボクの問い掛けに、ミキは悪戯な笑顔で小首をかしげる。

色黒のユミと正反対の彼女の頬は、白桃のように白かった。

「ねえ、キスしてたことある？」

ボクは彼女の白い顔に見とれながら素直に小さく頷く。

「うそ」

「ほんと」

「誰と？」

ミキは瞬きをしながら、ボクの瞳の中を覗き込んでいた。

「それは、ないしょ」

窓の外から忘れていた蝉の声が響いていた。

庭木の緑の香りを、風が運んでくる。

「じゃあ、あたしともできる？」

ミキがグツとボクに顔を寄せてきた。

ボクは首を横に振ろうとしたけれど、その前にミキの唇がボクの口を塞いだ。

ぬるりと何かが口の中へ進入してくる。

生暖かい。

自分とは違う体温を口の中で感じた。

目は開いていたはずなのに、何も見えなかった。

ボクの舌先にミキの舌が触れた瞬間、背筋がせり上がる気がした。

ボクは拳を握り締めて身体の震えを押さえる。

冷やりとした何かが触れた。

彼女の手が、ボクの拳を覆ったんだ。

そつと優しく、それはボクに触れていた。

ユミとは違った大人の香気かおりが鼻孔を抜ける。

扇風機の風が、テレビの上の新聞をパタパタと仰いでいる音が聞こえた。

いま考えると、ボクを包み込んだあの甘酸っぱさは、冷やし中華の香りだったのかもしれないけれど……。

第3章 【3】脅える眼

緑の茂みにバツタが跳ねていた。

ボクはバツタに触る事ができない。

カブトムシやクワガタと違って、羽根をむき出した昆虫は気持ち悪くて触れないのだ。

ユミは躊躇なく傍らの雑草に乗ったバツタを掴んだ。

口から黒い何かを出すのも気持ち悪い。

でもボクはそんな素振りは微塵も出さずに、さり気なくやり過す。

「バツタいる？」

指で摘んだバツタを、彼女はボクに差し出す。

「いらないよ、バツタなんて」

「なあんだ」

ユミはそのまま腕を振ってバツタを放した。

ボクは心の中でホッと息をつく。

……なんで平気で触れるんだ。

ボクたちは、ユミの家からそのまま駅の引込み線へ来ていた。

ボクはプールの用具入れを錆びた線路上に置いて、ユミと一緒に生い茂る雑草の中を歩く。

何度もユミをチラ見して、彼女の唇に視線を止めた。

ミキがボクの口に吸い付いたとき、まるでそのまま食べられてしまふような恐怖と、何だか判らない高揚感が身体を熱くした。

誰かの舌は熱い。

自分の舌も、あれほどに熱いのだろうか……。

「なに？」

ユミが僕の視線に気付いた。

「別に」

ボクは目の前に見えるボロ小屋に視線を移す。彼女も直ぐに意識

を小屋へ向けた。

「いるのかな？」

「知らないよ」

小屋から奇妙な気配を感じてボクは、半歩後へ下がる。

あの気配だ。

霧雨の中で感じた気配を、ボクは本能に刻んでいたようだ。

本線の向こうに茂る木々のトンネルから、蝉時雨が呼んでいる。

「久しぶりにボート小屋いかない？」

ボクはユミの肩に話しかけていた。

「今日はこのボロ小屋を探検するんじゃない？」

ユミが振り返る。

「何もないよ」

彼女はボクの足元に視線を落とし「じゃあ、なんで下がってるの

？」

「足がかゆい」

ビーチサンダルでプールへ行き、そのままのここへ来た足は雑草の中では確にかゆかった。

ユミは肩をすくめると、一端茂みから出る。

錆びた線路に二人で腰掛けて、少し遠めに小屋を眺めた。

10メートル以上離れたこの場所なら、あの異様な気配は感じない。

木枠の窓に、夕方の西日が強く映りこんでい。

「コーラ買って来る」

ボクは立ち上がって、ポケットの小銭を探る。

駅の改札口（と言っても無人だが）を出たところに自販機が二台並んでいる。

ボクはその自販機を眺めて「ユミもなんか飲む？」

その時だった。

「アッ」

と言って、ユミもいきなり立ち上がる。

「なに？ どうした？」

ユミはスツと腕を前に伸ばして、ボロ小屋を指差す。

「今、いた」

「何が？」

ボクは直感で判ったけれど、やっぱり訊かなければ。

「口さけ女」

「口さけ女？」

「口が裂けてたか判ないけど、誰か見えたよ」

ボクは陽射しが映りこんだ窓に目を凝らす。

ピントを奥に向けると、小屋の内部が薄っすらと浮かび上がる。

「何もいないよ」

「いたよ。トモ、行つて見て来なよ」

「ヤダよ」

「怖いんだ」

「だって、口さけ女は人を喰うんだぞ」

ボクは声を上げた。

「私きれい？ って訊かれなきゃ大丈夫だよ」

「そんなの判ないだろ」

ユミは一步踏み出して「じゃあ、あたしが見てくる」

「やめろよ」

ユミの腕を取った。

陽射しを浴びた彼女の腕は、思いの外火照っていた。

口さけ女なんているはずないっていままで思っていたけれど、急にいてもおかしくないような気がした。

……そんなはずないのに。

「じゃあ、一緒に行こう」

ユミはそのまま歩き出す。

ボクは仕方なしに、彼女について歩き出した。

二人で歩き出して直ぐだった。

線路脇の砂利から草むらへ入る前、まだ二人の足音が砂利をじゃらじゃらと踏んでいた。

小屋のどこかでガタガタと音がしたんだ。

さすがのユミも思わず足を止めて息を飲んだ。

ボクは息を潜めるように、ユミの後ろ髪と小屋を交互に眺める。

息使いが小屋へ届いてはいけないと思った。

気が付くとボクたちは耳をすましていた。

姿が見えない何かを探るとき、人は聴覚を必要とするのだ。

窓の中には何も見えない。

光の中にくすんだガラスの世界が夕風に佇んでいた。

再びガタガタと音がした。小屋の裏側からだ。

ボクたちは雑草を掻き分けて走った。

獣道のような小道を進んで、小屋の裏側にまわる。

建物の裏には小さな裏口扉があつて、そこは施錠が壊れていたよう

うだ。

ボクもユミもそれに気付かなかつたらしい……。

そしてそこに見たものは、髪の毛が肩よりも長くてヒゲをはやし

た長身の男の姿だった。

彼は振り返ると、目をギョロリとさせてボクたちを見つめた。

野良犬が牽制するような、どこか脅えて、そして攻撃的な視線に

ボクとユミは足を止める。

長身の男はボロボロのシャツに毛布を撒きつけたような、スカー

トのような何かを腰に巻いていた。

ズボンを履いていたかは覚えていない。

ボクらは、彼のギョロついた視線にクギ付けにされていた。

蛇に睨まれた蛙というのは、こんな感じなのだろうか。

男はユミとボクを見比べるように交互に見つめたまま雑草の生い

茂る中を歩くと、雑木の小さな林を抜けその先に消えた。

その先には借家が並んでいるけれど、おそらくソコを通り抜けて
通りに出ただろう。

長髪の小汚い男が何処へ行くのか興味はあつたけれど、ユミもボクも暫くその場から動く事は出来なくて、背中から聞こえる蝉の声だけを聞いていた気がする。

快速電車が通り過ぎる轟音で、ボクたちは我に歸つた。

第3章 【4】感触

この夏はなんだかユミと一緒にの事が多かった。

おそらく夏休みの初めに彼女と過ごした事が引き金になって、気が置けない心地よさを思い出したのかもしれない。

とは言っても、プールに行く日取りを合わせて、その帰りに出来たばかりのコンビニエンスストアへ立ち寄ってコーンアイスを食べるのが決まりのようなものだった。

互いに電話をするような事はない。

プールの帰り道、次に何時来るかを相談して決めるだけだ。

途中で待ち合わせて一緒に行くような事もなかった。

その頃のボクとユミは、あくまでも学校のプールで出逢って帰りを共にする。

偶然のようで必然的な、そんな付き合ってた。

しかしこの日、午前中にユミから電話があった。

お腹が痛いから、今日はプールに行かないという事だった。

ボクは準備していたプール用具を眺めて息をつく。

ユミと都合を合わせる事で、サトシとは全く連絡をとっていないから、何だかいきなりプールに誘うのも今更のようで気がひけた。

彼もプールへは行っているようだが、時間が合わないのか何故か出くわさないのだ。

ユミと一緒にの時はそれで都合よく感じたが、彼女が欠けた事でいささか困惑めいていた。

それでも特に予定のないボクは、結局午前中のプールに出かける。水に入るのは好きだし、泳ぐのも好きだった。

ガラガラと眩しい蒼穹には、銀色に近い入道雲が大きく立ち昇っていた。

ボクはプールサイドに腰を下ろしたまま空を仰ぎ、どれだけ高い

空に昇るか判らない入道雲を見つめた。

くるとトビの舞う姿が、黒い影となって浮かんでいる。

眩しさに耐えられず頭ごと視線を下へ向けた。

膝を抱えた体育座りの足先を見つめると、コンクリートのタイルに黒アリが歩いていた。

フツと日陰が出来る。

ボクの足先のすぐ前方に白いつるりとした脛が見えた。

指の長い、スラリとした足がこちらを向いている。

ボクはゆつくりと顔を上げた。

逆光の中に、彼女のシルエットが浮かんでいる。

濡れた短い髪が、空を背景に少し跳ねていた。

その日のプールは何故か人が少なかった。

辺りを見回しても同じクラスの連中がほとんど見当たらず、他の学年、他のクラスもちろん少ない。

たいていあるはずの、交替制によるプールへの入水がその日は無くて、ただ時間毎に休憩が用いられるだけだった。

プールサイドに何時もの賑やかな喧騒はない。

蝉の声が通り過ぎ、陽射しがコンクリートタイルを白く照らしていた。

笛の音が聞こえた。

微かなざわめきと共に、水しぶきを立てて入水する連中を、ボクたちは並んで眺めていた。

「あたし、泳げないのよ」

「うそ」

「ほんとだよ」

千春が恥ずかしそうに目を細めて笑う。

「トモは泳ぎ上手いよね」

夏休み前の授業で、彼女はボクの泳ぎを見ている。

そう言えば、千春の泳いでいる姿をボクは見していない。

「ぜんぜん泳げないの？」

「うん。ぜんぜん……」

千春は恥ずかしさをしのぐ為か、ボクの二の腕をパシリと叩いて笑う。

「そんな目で見るな」

誰かが飛び込んだ水しぶきが、目の前に飛んできてタイルを濡らす。

本当は飛び込は禁止だけれど、今日はひと気が少ないせいか監視員のお兄さんもあまり注意はしないようだ。

「じゃあ、俺が教えてやるよ」

「ホントに？」

千春はボクの腕を軽く掴んで笑う。

やたらと嬉しそうなのは、何か理由が在るのだろうか？

ボクと千春は深水ふかみの場所へ行つて、水に体を浸けた。

25メートルプールは飛び込台の在る側が一番深くて、対面に向うに従い段々浅くなる。

深水ふかみの場所で遊ぶ連中は少ないので、比較的空いているのだ。

「足着かないよ」

「着くよ」

顎がちょうど水面に浸る辺りでボク達の足はようやく着く。

泳げない人間にとって、顎が水面に浸る感覚はとてつもなく不安らしい。

しかしボクが手本を見せると、千春はギリギリで足を着き、安堵の笑みを浮かべながらプールサイドの手すりを放した。

「大丈夫だろ？」

「うん」

頷いた拍子に口が水の中へ入って、千春はブクブクという返事を返してきた。

プールサイドに手を着いてバタ足の練習。

彼女は水面に顔を着けるのは抵抗がないらしい。

それとも横でボクが支えていたからなのだろうか。

ボクは千春の身体の何処に触れて支えればいいのか躊躇しながら、結局おなかの部分に腕をあてがった。

バタバタと身体が動いて、何だか柔らかくて冷たくて……とにかく妙な感じだった。

それが顔に出ないように、ボクは千春を支える。

フツと、身体が流れた。

プールサイドから手が離れてしまったらしい。

千春が慌てて立とうとしたから、ボクも急いで彼女を支え直そうと両手を動かした。

少しの出っ張りに両腕が引っ掛かるようになって、彼女を抱きかかえる。

千春は慌ててボクの腕を払おうとしたけれど、ボクは千春が混乱していると勘違いして腕に力を込めて彼女を支え続けた。

しかし……ボクが抱え込んだ小さな出っ張りには、彼女の小さな胸だったのだ。

「ご、ごめん」

気付いたボクは、慌てて腕を離す。

再びプールサイドにしがみ付いた千春は、息を切らしながら

「別にいいよ。大丈夫」

顔が紅潮していたのは恥じらいのせいか、それとも勢いのあったバタ足のせいだろうか。

ボクはとりあえず彼女の言葉を信用する事にした。

気にすればするほど、彼女が羞恥すると思ったから。

だからボクが気にしない素振りを見せた方がいいと考えた。

だけど……

アザラシのお腹の様な（アザラシには触った事がないけれど……）水着の上から触れた彼女の柔らかい胸の感触を、ボクは暫く忘れる

事はできなかった。

それから今度は、気を取り直してクロールの腕の回転を教えた。
その後、平泳ぎを教えると

「こつちがいいなあ」

と、彼女は笑う。

見た目にも泳ぎ易そうだったし、息継ぎも直ぐに出来るようになった。
つた。

ボクはといえば、どうしても視線が彼女の胸に留まってしまう…
…。

第4章 【1】浴衣とラムネ

眩しさに溶ける水しぶきが塩化カルシウムの香りを運んでくる頃、ボクは毎日放課後のプールで透明な梓の中で泳ぎ続ける。

五年生の夏、ボクは特設水泳クラブに入部した。

入部できるのは、体育の授業で学校が規定する水泳検定3級以上の者だけだった。

ボクは、もちろん1級を得て、入部を許された。

クロールを得意とするボクは、当然のように自由形の選手候補として放課後のプールで練習を続ける。

担任教師から連絡が行き、今年も顧問となった地主先生が立会いの元泳ぎを披露した。

直ぐにOKが出て、100メートル自由形選手の候補となる。

もちろん、六年生の選手もいるわけで、ボクの分誰かが梓から外れる事になる。

そんな事情から、ボクへの風当たりは少々強いような気がした。

部長はいたが、主導権は全て顧問にあり勝手な練習メニューなどは認められていない。

その為、中学や高校の部活にあるようなシゴキがないのは幸いだったような気がする。

五年生になると、三度目のクラス替えがあった。

もちろんユミとは同じクラスにならなかったが、千春とも違うクラスになってしまった。

同じクラスという同盟意識が繋いでいた彼女との縁は、あっけなく知らぬ間に薄れていった。

時ものようにボクはウォーミングアップの1000流しをやっていた。

1000流しとは、顧問の地主がくるまでに自主的に1000メ

ートルを自分の競泳スタイルで流して泳ぐ事だ。

基本的には足を着いてはいけないのだが、ほとんどの連中は途中で一休みする。

ボクは絶対に途中で休まない事を自分の規約にかかげて1000流しをした。

しかしこの日、誰かがボクの横から歩いてきてコースを塞ぐと、避けるボクにわざとらしくぶつかって来た。

それでも泳ぎ続けるボクに、もう一人がさらにぶつかる。というか、よるけるフリをしてボクの背中に覆いかぶさってきたのだ。

たまらずボクは足を着いて立ち止まった。

六年生の誰かだった。

眼中にない奴らの名前なんて、覚えていない。

彼らは冷ややかな笑いを浮かべて、プールサイドへ歩いてゆく。

中には25メートルを数往復しただけで、1000流しを誤魔化す連中がいる。彼らはそういったサボリ組みだ。

サボリ組みに限って、努力者の邪魔をしたがるのは、何か心理的原因なのだろうか。

「ちよつと、今のわざとでしょ」

大きな声がしてボクは振り返る。

3つ離れたコースで立ち止まる女子がいた。

「上級生のくせにみつともない真似止めなよ」

彼女はプールサイドに上がる途中の二人組みの背中に声をぶつける。

山口ヨウコ……六年生の中で1000流しの途中、ひと休みもしないのは彼女だけだという事をボクは知っていた。

彼女は同じ学年の陰険な行動を見かねて声を出したのだ。

言い換えれば、ボクの為に足を着いたのだ。

「大丈夫？」

少し心配そうに彼女はボクの方を覗いた。

ボクは上級生の女子に声をかけられて、上手く返事が出来ない。

小さく会釈だけをして、1000流しの続きに戻った。

彼女と言葉を交わしたのはそれだけだった。

夏休みに入っても毎日練習はあったが、上級生の女子と会話を交わす機会など何処にもない。

ただ、8月10日の市民水泳大会の応援席で、彼女はボクにレモンスライスを勧めてくれた。

選手控え室などのない大会会場では、応援席がそのまま選手の控え場になっていたのだ。

ボクは100メートル自由形で二位の表彰を受け、山口ヨウコは平泳ぎ女子100メートルで3位の表彰を受けていた。

夏の陽射しに舞う水しぶきが消えると共に、ボクのひと夏は終わったような気がした。

1位にはなれなかったけれど、毎日欠かさず練習に通った満足感がボクに燃え尽き症候群にも似た気だるさをもたらしたのだろう。

この夏、ボクは数年ぶりに祖母の家に遊びに行った。

山と海に囲まれた深い緑色の世界。

カッコウの声が朝靄の山々に響き渡り、蝉の喧騒が空気を染める。雨水の水滴越しに観たような、透き通ったこの風景がボクは好きだった。

お盆に合わせて兄と共に来る予定だったが、急遽キャンプが決まったと言って彼はキャンセル。

結果、ボクだけが一人でこの山村のような町へ来た。

さすがに市に含まれるこの、地も村ではないのだ。

海辺の近くに文房具と駄菓子やぐらを売っている店が在って、その大きな敷地に盆踊りの櫓やぐらが建てられていた。

紅白の布で覆われた二階建てほどの高さを持つ櫓を囲んで、三日間盆踊り祭りが開かれるのだ。

婆ちゃんに連れられて、夜の七時前にボクは盆踊り会場へ向った。

車がやっと一台通れるような細い小道を歩く。

まだ完全に陽は暮れていないが、山に向って聳える杉林が黒々と壁を作っていた。

街路灯の無い小道では、懐中電灯が必需品だった。

そんな文明から少し遠ざかったような所が、ボクの心をドキドキさせる。

うねった小道を暫く歩くと舗装道路にでる。

少し手前から櫓に燈る提燈ちようちんの華やかな明かりが目にとまった。

まだ音量は低いが、何とか音頭とかの歌が流れている。

それは夏の風物として、充分子供の心をくすぐった。

婆ちゃんは大鼓の係りを請け負っているらしく、少しすると背中を丸めて櫓に登る。

ボクはラムネを口にしながら、ぼんやりとその櫓に燈る提燈などを眺めていた。

気がつくはずいぶん人が集まってきている。

どこから出てくるんだろう……。

こんな小さな部落でも、総出でお祭りとなれば結構な人数がいるもんだ。

お盆休みと言う事もあって、東京などから実家に帰郷している人もいるようだ。

部落に住む人から見れば、孫にあたる子供の姿も沢山目につく。

もちろん、ボクもその中の一人なのだけれど。

ラムネを飲み終えたボクは、ソーダアイスを買って口にくわえた。別に盆踊りをするわけでもないボクにとって、食べ物や飲み物だけが目当てともいえる。

何と言っても、ここにいるだけで次々にアイスやジュースが廻ってくるのだ。

半分食べたアイスをくわえたまま、ボクはふと踊りの始まった輪に目を留める。

水色に赤や黄色の朝顔が散りばめられた浴衣が、視界の全てを満たした。

ボクが見る風景は、そこだけが丸く切り取られていた。少し前から彼女はそこにいたのだろうか。

髪をアップにして後にまとめたお団子には、何か髪飾りが付いている。

それはボクの記憶にはない彼女の姿だった。

山口ヨウコ。

そう、水泳クラブで一緒だった六年生の彼女だ。

四方に張り巡らされたロープに提燈が吊るされて、淡い光で踊りの輪を照らしている。

その淡い光が彼女の浴衣の朝顔だけを、克明に映し出していた。何時もさらけ出した彼女の素足は、今夜はすっぽりと浴衣に包まれて妙にお淑やかに見えた。

両手を遠慮気味に動かして踊る彼女の姿を、ボクはなおもぼんやりと見つめて、気が付くと融けたアイスが足元にぽたりと落ちた。

第4章 【2】見知らぬ知人

婆ちゃんの叩く太鼓の音が、連なる提燈の明かりの枠を超えて闇に溶け出していた。

次から次へと流れる盆踊りの曲は、ボクの頭の中を素通りして直ぐ後の防波堤の向こうへ消える。

微かな波の音が、鳴っていた。

ボクはぼんやりと浮かぶ踊りの宴の中に視線をさ迷わせる。

半周するとヨウコさんの姿は消え、再び円の中から現れるのをボクは待ち続けた。

近づいて行きたかった。

でもボクは、気が付くと後ろへ下がっていた。

その夜、ボクは敷地の外れから提燈の明かりの中に浮かぶ盆踊りの櫓を眺め、ヨウコさんの姿を眺めていた。

満ち切った潮の香りが背後からボクの心に沁みて、何だか塩辛い想いがした。

* * *

潮が引いた海は砂浜が広く現れて、養殖用の黒い樽のブイが海面に接触して横向きに転がっている。

ボクは防波堤の上に肘を着いて、遠く離れた水面を眺めていた。幾つも並んだ棒杭の上に、一羽ずつカモメがとまっている。

「朋也君？」

ボクは空耳だと思った。

婆ちゃんの家のあるこの小さな部落で、若い女性がボクの名を呼ぶという事は、考えられなかった。

ボクの記憶に在るヨウコさんの声が、風の悪戯で耳を掠めたのだ
と思った。

でもボクは振り返る。

レモン色のワンピースを着たヨウコさんが、手を後ろに組んでボ
クを珍しいアライグマでも見るように見つめていた。

「あつ……」

「やっぱり。朋也君だった」

少し離れた場所に立っていた彼女は、そう言っ
てボクに歩み寄る。夕風にスカートの大きな裾がヒラヒラと揺れた。

「昨日の夜、いたでしょ」

「えっ？」

「盆踊り」

ボクがいたのは、佐藤商店の裏だった。

昨晚盆踊りを行った敷地に立つ店の、直ぐ裏側だ。

盆踊り祭りは明日まで行われる為、櫓は佇んだまま日中の陽射し
に照らされて沈黙している。

「うん」ボクは短く応える。

「朋也君も遊びに来てるの？」

「婆ちゃん家が、すぐ近くで」

ヨウコさんは、ボクと並んで防波堤に背を着けた。

髪をかきあげる時、袖なしワンピースから脇の下が見える。その中の
素肌には、白いレースがチラチラと見え隠れしていた。

彼女はもう大人になりつつあるのだと思った。

「今夜も来る？」

海に背を向けると、視界に入るのは遠くまで連なる山々。

深い緑に囲まれた木々の隙間を縫うように、鳥の囀りと蝉の音が
聞こえた。

「うん。たぶん」

「お婆さんの家は近く？」

「この先の、突き当たり」

盆踊りの敷地とその先の細い国道を跨いだ正面に見える小道を、ボクは指差す。

「ああ、そうなんだ」

ヨウコさんは笑った。

「知ってるの？」

「山菜採りに行くとき通るよ」

突き当りとボクは言っただけ、車で入れる突き当りであってその先にもさらに細い小道は山の尾根に沿って続いている。

確かにボクも、婆ちゃんや兄貴と一緒にその小道を登って山菜を採りに行った事がある。

「あたしのお母さんの実家はね、トンネルの手前を入った集落にあるんだよ」

去年山をくり貫いて、近くにトンネルが出来た。

ヨウコさんがその手前を入ると言った道は、トンネルが出来る前は道なりだった所だった。

婆ちゃんの知り合いが住んでいるので、その集落もボクは知っていた。

小さな山々と海に囲まれたこの部落は、あちらこちらの山のふもとや海岸沿いに小さな集落がチリジリになって構成されている。

ボクはよく解らないけれど、きっとヨウコさんのお婆さんもボクの婆ちゃんと顔見知りのはずだ。

ボクたちは少々曖昧に約束を交わしてその場で別れた。

本当はもっと一緒にいたかったのだけれど、ヨウコさんの親類がお昼の仕度が出来たと迎えに来たから仕方がなかった。

軽トラックの助手席から小さく手を振るヨウコさんの姿は、まるでこの地で知り合った見知らぬ知人に見えた。

ここで出逢った彼女は、同じ小学校のヨウコさんではないような気がしたんだ。

第4章 【3】夜光虫

船着場に行ってみようよ。

その夜、盆踊り会場に現れたヨウコさんは言った。

30分ほど輪の中で踊っていた彼女は、相変わらずラムネを飲み、アイスを齧っていた

ボクに小走りに近寄ってきた。

下駄がパカパカと軽快な音を奏でる。

「船着場？　これから？」

防波堤沿いに暫く歩くと、船着場が在る。

漁船が並ぶ岸壁と岩場が在って、何度かそこで泳いだ事もあった。盆踊りの最終日は、毎年そこで花火大会が行われる。

花火大会と言っても、手持ち花火をみんなでやるだけのささやかなものだ。

「大丈夫でしょ？」

彼女は自前の小さな懐中電灯を浴衣の帯から取り出す。

ボクは足元に置いた、婆ちゃんから借りた懐中電灯を見下ろした。
「うん」

ボクたちは防波堤に沿って歩いた。

暗闇から満潮の波の音が静かに聞こえる。

「こっちで泳いだ？」

ヨウコさんの笑顔は、薄闇にぼんやりと浮かぶ。

「前は泳いだけど、今年はまだ」

「あたしも」

ヨウコさんはククツと声を出して笑うと

「プールでいっぱい泳いだもんね」

言われて思い出す。

お盆前まで、ボクらは毎日毎日プールで半日を過ごしていた。

ウォーミングアップで1000メートル。流して50メートルを5本。それから、種目別に5回タイムを測って、再び50メートルを5本流す。

毎日2キロ以上は泳いでいたのだ。

肩で息をつき、水が滴るヨウコさんの姿はここには無かった。

浴衣で小股にパカパカと音をたてて歩く、この地で出逢った少女。「懐中電灯いらないね」

ヨウコさんは防波堤の先に見える船着場を見た。

遠くにイカ釣り漁船の明かりが煌々と光っている。

背中から聞こえる賑やかな音色が、少しずつ遠ざかって夜に溶けてゆく。

正面に続く微かな月影の導き出す闇に、二人の足音が響く。

彼女からはリングのような甘い香りがした。

シャンプーの香りなのか、彼女自身の香りなのかは解らないけれど、なんだかボクは眉間の奥に熱いものを感じる。

耳が終始熱かった。

「夜の海って、真っ黒だね」

船着場の栈橋から、ヨウコさんは海を見下ろす。

ボクも隣で一緒に見下ろした。

濃色の透き通る世界が足元に奥深く沈んでいた。

僅かな月明かりを浴びてチラチラと見える黒い岩や岸壁にへばりついたフジツボが、もうひとつの世界を見出し出している。

ヨウコさんは帯に挟めていた小さな懐中電灯を取り出すと、海中を照らした。

明かりが通り抜ける場所だけが、白く浮き出る。

「あっ、カニ」

ヨウコさんが身を乗り出す。

海中の岩陰で、カニがこっそりと息を潜めていた。

ボクは何故か、昔ユミが古いボート小屋でひざを丸めて座り込んでいる姿を思い出す。

なんでこんな時に？

ヨウコさんの横顔を盗み見た。

「ね。いるでしょ」

「うん……」

ボクはただ頷いて見せた。

「明日、花火だね」

「手持ちの子供騙しだよ」

「でも楽しそう」

ヨウコさんはそう言って笑うと

「参加した事なかったけど……トモヤ君も来るでしょ？」

「うん……来ようかな」

「来ようよ」

ヨウコさんの手が、ボクの腕に触れた。

「うん。いいよ」

ボクは岸壁の縁に足を垂らして腰掛ける。

ヨウコさんは、小さな小石を掴んで足元の海面に放った。

濃色の水面にポチャリと波紋が広がる。みなも

黒い海中に、キラキラとエメラルドの小さな光の粒が沸き立つ。

波紋に揺られるように淡く輝いた光は、幻のようにあつと言つ間に深い世界に消えた。

第4章 【4】虫の声……。

カッコウの鳴き声を聞きながら目覚めた。

婆ちゃんの家は畳みの濃い匂いに包まれている。

古い木の香りが年季の入った柱のあちらこちらから匂ってくる。

そんな婆ちゃんの家が、ボクは気に入っていた。

ラジオ体操も無く、少し遅い時間に起きて朝ごはんを食べると爺ちゃんは何処かへ行ってしまふ。

今思うと、何処かへ働きに行っていたらしい。

知り合いの畑を手伝ったり、漁を手伝ったり……昔の小さな部落は何かと手伝いの仕事が転がり込んだのだろう。

婆ちゃんの家に来たからと言って、これと言って何か目的が在るわけでもない。

少しすると、婆ちゃんも何処か知り合いの家に用事で出かける。

用事といっても、茶をすすりに行くんだろうけれど……。

ボクはひとりで、直ぐ傍を流れる小さな小川なんかを眺めにゆく。全ての景色が何時もの日常とかけ離れて違うから、何処にいてもボクは退屈しない。

小さな小川は本当に小さくて、二跨ぎで越えられる。

ゴロゴロした石が透明な冷たい水に沈んで、ボクはその合間を流れる水に触れるのが好きだった。

暑苦しい蝉の声を聞きながら、冷たい沢の水に木片を浮かべて一人遊びをする。

木々の緑は、陽射しを遮って少しだけ澄んだ風が頬を撫で続けた。

お昼頃帰ってきた婆ちゃんとお昼を食べて、庭の植木の合間を舞うアゲハチョウを眺めながらスイカを頬張る。

午後は何をしようか考えた。

夜の花火大会までは大分時間がある。

ボクはヨウコさんの笑顔を想い出して、少しだけにはかんだ。

「今、中原のコウスケが帰って来てるんださ」

婆ちゃんが台所から、縁側のボクに言った。

「コウスケって？」

「中原の孫だよ。昔遊んでもらったの、覚えてねえか？」

船着場を越えて小さな峠を越えた所に、婆ちゃんの古い友達がいる。

その中原バア（婆ちゃん）の孫らしい。

確かに昔、海で一緒になって遊んでもらった記憶は在るけれど、当時その年上の少年が何処の誰なのかあまり気に留めていなかった。
「ああ……」

ボクは気のない返事をしてから、眩しく澄み渡る空を見上げた。
コウスケは、ボクの住む町へ下りて何処かの中学に通っているらしいけれど、本人に逢っても直ぐに思い出せるかどうか自信は無い。

蝉の声が山々を囲っていた。

ボクは高く上った太陽の陽を浴びながら、海沿いの防波堤に沿って歩いていた。

直ぐに船着場が見える。

昨夜のヨウコさんの残像に導かれるように、ボクは船着場に下りた。

漁に出ているのか、昨晚よりも停泊している漁船は少なかった。

カモメの声が、蝉に負けじと当たらに響き渡る。

船着場の横は山の岩肌が見える崖になっていた。

そのふもとには古びた小屋が幾つか並んでいる。

おそらく、漁師が個々に使っている道具小屋だろう。

ボクは何がない興味に引かれて、古びた小屋を眺めて歩いていた。昔も覗いた事はある気がするけれど、何年前の事が覚えていない。

し、どんな風だったかも覚えていない。

薄っぺらなガラス窓が、汐風で風化していた。

三つ目の小屋を、古びたガラス越しに覗き込んでボクは息を飲む。そんな瞬間は経験した事が無かったから、飲み込んだ息が逆流しそうになるのを必死で堪えた。

蝉の喧騒とカモメの歌声が、ボクの気配を消していたに違いない。

その小屋の中には、ヨウコさんがいた。

そして一緒にいたのは中原のコウスケ。

その男がコウスケだと、ボクはひと目で判った。

大きなナワの束に、ふたりは重なるようにもたれかかって座っていた。

コウスケの半身上に、抱かかえられるようにしてヨウコさんの身体があった。

ボクといるときに比べて、彼女の身体は小さく見える。

向日葵色のワンピースと日焼けした肌が、薄闇に浮き上がっていた。

彼女を抱かかえるコウスケの片手は、彼女のワンピースの小さな胸の隙間に消えている。

そしてもう片方の手は、向日葵色のふわりとした裾をたくし上げて、その中に消えていた。

ボクの思考は錯乱……いや、混乱した。

一瞬ふたりが何をしているのか判らなかったから……。

それが何の行為か解った途端、胃の奥から何かがせり上がって来そうになって、慌てて静かに唾を飲み込む。

コウスケの左手がぎこちなく動くと、ヨウコさんのワンピースの裾が動いた。

見慣れたはずの日焼けした太股が別の何かのように見えて、ボクは大きな息を吐き出しそうになるのを堪える。

淡い水色だった……。

薄汚れたガラス越しに、淡い水色の生地とそこに散りばめられた小さな赤い花模様が見えた。

煌々とボクを照らす陽射しとは裏腹に、小屋の中は薄闇に包まれていた。

それでも彼女の下着ははっきりと見えて、その中にコウスケの手は消えて膨らみを作っていた。

ヨウコさんは辛いような、何かを求めるような不思議に神秘的な表情をして目を閉じていた。

ボクは駆け出す。

蝉の喧騒も、カモメの歌声も聞こえはしなかった。

何処か別の空間にでも迷い込んだように、何も聞こえない真っ白な闇を、ボクはただ走っていた。

息を着いて立ち止まったのは、盆踊り会場の櫓の下だった。

息を弾ませて空を見上げると、そこには相変わらず眩しい陽射しが沈黙の中でボクを照らしていた。

蝉の喧騒が蘇える。

遠くでカモメの声が聞こえた。

熱い汐風が、堤防を掠めて雑木を揺らしている。

ボクはその風に逆らって防波堤に近づくと、やたら遠くに感じる船着場を眺めた。

波に揺られる漁船の姿が、蜃気楼のようにゆらゆらと霞んでいた。

その夜ボクは、盆踊りにも花火大会にも行かなかった。

夜の帳に、虫の声が悲しげに鳴り響いているのをただ聞いていた。

第4章 【4】虫の声……。 （後書き）

お読み頂き有難う御座います。
次回から、いよいよ最終章 小学六年生です。

第5章 【1】予期せぬ事

小学校というのはとても不思議な場所だと思う。

入学当初は幼稚園児に毛の生えたような幼さの塊で、ひき算さへもろくにできない。

しかし学年が上がり時間の経過と共に割り算や分数やちよつと難しい常用漢字なんかも書けたり、社会性や道徳を学んだり。

そして誰かに淡い想いを抱いたり。

でもそんな想いも、日常の過ぎ去る日々と共にどこかへ消えて、再び来たる何かに興味を惹かれるのだ。

それは自然な事で、きつとそうした日々流され、埋もれる事で、ボクらは成長できるのかもしれない。

最上級生。

担任教師が六年生になったボクらにやたら使う言葉だった。

その自覚を持って下級生の手本となり、自主性を重んじるのだと何度も強調する。

そんな教師の思いも届かぬように、ボクはあまり変わらない。

いや、教師がそんな事を言うまでもなく、ボクらは変わってゆくのだ。

六月の半ばに入ると、再び水泳部の徴集があつて、ボクは当たり前のようにそれに参加する。

去年とは打って変わって、ボクはウォーミングアップの1000メートル流しで、平気で足を着いたりひと休みしたりした。

時には800メートルくらいで上がってしまう。

もちろん、顧問や周囲の目を盗んでだけれど。

「トモ」

土曜日の放課後、部活が終わってプールから出ると、校庭の隅でユミが待っていた。

「なんだよ」

「今日、遊びに行っている？」

最近めっきり遊ぶ事が少なくなったユミと言葉を交わすのは久しぶりだった。

もちろん、クラスは違うし。

「どうして？」

「別に……暇だし」

ユミは少しだけ俯くと

「なんか予定ある？」

「別に無いけど」

この頃になると、女の子と二人でどうして遊べばいいか判らなくなる。

複数で遊ぶのは平気だ。

鬼ごっこやドッチボールやその他のいろんな遊びをただ男女混合でやればいい。

でも二人でどうする？

前はどうしてたっけ？

成長とともに男は男を意識して、女は女を意識する。

その意識こそが、純粋な交友関係を妨げるのかもしれないと、ボクはこの頃既に悟っていた。

久しぶりに古びた引込み線の上にボクたちは腰掛けていた。

朽ちた枕木が積み重なる周囲は、すでに雑草が生い茂っていた。

「部活、大変？」

ユミが訊いた。

「別に。楽しい」

「ふうん」

敷石を拾って、彼女は草むらに放り投げる。

「今日、泊まってダメ？」

「トマルって？」

「トモの部屋」

ボクは一瞬引いた。

トマルとは宿泊の意味だ。

何のためにボクの部屋に泊まりたいのだろう……。

けれどもユミには彼女なりの悩みがあったのだ。

最近母親が家に男を連れてくるらしい。

前の父親よりも若いその男は、母親が見ていない時にユミの身体にやたらと触るらのだという。

「触るって……？」

ボクは、本当は訊いてはいけないような気がした。

でも、訊かずにはいらなかった。

触るというキーワードで一瞬、忘れていたヨウコさんの姿が浮かんだ。

「なんか、べたべた触ってくる。いろんなところ」

「いろんなところ……て何処だ。」

「例えば……何処」

「腕とか脚とか……お尻とか……」

「嫌なの？」

「当たり前じゃん」

ユミは声を大きくした。

「なんか、お父さんと触り方は違う……なんか、男の触り方……」
男の触り方ってなんだ？ 父親だって男だ。

「でも、母さんに何て言おう」

ボクは困惑した。

最近あまりウチに来なくなったユミが、いきなり泊まりに来て大丈夫だろうか。

昔だって、お互いに泊まり合った事は一度も無い。

「内緒で泊めてよ。トモの部屋に」

「内緒で？」

今度はボクが声をはり上げた。

同じ家の中、親兄弟に内緒でなんて出来るだろうか……。

第5章 【2】夕食

ボクの家は驚くほど大きくは無いけれど、そう小さくも無い。

一階は半分がお店で、もう半分は茶の間と台所、風呂とトイレがある。

二階部分はお店の上也含むから、意外に広いかもしれない。

ボクには兄の他に目立たないが姉がいる。

三人がそれぞれ部屋を貰って、両親の部屋も在る。そして、婆ちゃんが出来た時に泊まる和室も在るんだ。

そんな二階のボクの部屋に、ユミをこっそり連れ込むのは意外に簡単だった。

「なんかちょっとワクワクするよね」

声を潜めてユミが笑う。

「ご飯はどうする？」

ユミは小さなリュックに手を突っ込むと

「菓子パン買ってきたから、大丈夫」

準備がいい。

ボクたちは陽が暮れるまで外をブラブラして、夕暮れ時になってから家の中に戻った。

土曜の夕方には観たいテレビがある。

でも、ユミを置いて一人で茶の間でテレビを観るわけにもいかないし、仕方ない。

ボクはユミと自分の部屋にすることにした。

「ねえ、これ何？」

ユミがガンブラを指差す。

「知らないの？」

「どこかで見た事ある」

女同士の姉妹は、さすがにロボットアニメなど観ないようだ。

「トモが造ったの？」

「そうさ。全塗装だぜ」

彼女は「ふうん」と唸るように頷いて、フル塗装されたガンプラを眺めていた。

ボクは暇つぶしに、そのアニメの内容やうんちくを語って聞かせる。

ユミはいかにも興味ありげにふんふんと頷いていた。彼女の聞きの手ささが、ボクに心地よさをもたらす。

……だから昔は何時も一緒だったのかな。

久しぶりに長い時間彼女といっても、ぜんぜん気が置けなくて、胸の中がほんのりと、ふわりと暖かい。

夕飯の時間、ユミはボクの部屋でアラレちゃんの原作漫画を読んでいた。

声を潜めて笑うのが大変だったらしい。

「ユミちゃんのお母さん、最近男の人連れてるって」

味噌汁をすすりながら、母さんが言った。

ボクはチラリと視線をくべて、直ぐにご飯を頼張る。

「トモ、何か知ってる？ ユミちゃんところ、しばらくお父さんいないしさ」

「新しいお父さんが出来ても、おかしくないからな」

母に応えるように、上着を脱いでランニング姿になった父さんが言う。

ボクは再びご飯を頼張って

「知らない……」と一言。

何も言いたくは無かった。

その男がユミの身体を触ることとかはもちろん、新しい父親になるかどうか……。

……そんなの知らないよ。

夕飯が終わると、ボクはプラモを造るからと、早々に茶の間を後にする。

兄貴も何か自分の事で直ぐに部屋へ帰るから、ウチの場合はそれが自然なのだ。

台所からバナナとリンゴとポテトチップスを持ち出して、ボクは階段を上がった。

ユミはアラレちゃんの漫画を胸の上に置いたまま、スヤスヤと寝息をたてていた。

ボクはまるで大人のように肩をすくめる。

開け放たれた網戸からは、涼しげな夜風が入り込んでいた。

ボクはそつと窓を閉めると、ベッドの上に腰掛けた。

傍らには菓子パンの空き袋が二つふわりと転がっている。

両親に適当なウソでもついて、ユミも一緒に食卓を囲めばよかった……。

何だかボクは、悲壮感に苛まれる。

別に彼女の寝顔が悲しみに満ちているわけでもないのに。

「ああ、もうご飯終わったの？」

ユミがぱちりと目を開けた。

まるで催眠術から目覚めたように。

「うん」

ボクは持つて来たバナナを彼女に差し出す。

「うわ、ありがとう」

ユミはバナナを頬張り、艶のあるリンゴを齧った。

隣の兄貴の部屋からは、何も聞こえない。きつとヘッドホンで音楽がラジオでも聴いているんだろう。

ボクたちは二人でベッドに寄りかかり、声を潜めて他愛無い話しを続けた。

会話の合間には、パリパリとポテトチップスを齧る音が響く。

「トモ、お風呂入ったら？」

階下から母さんの声がした。

末っ子のボクには、何時も最初に声がかかる。

兄貴は何時も夜更かししているし、姉さんは何時の間にか入っている。

ボクは部屋のドアを少し開けて

「後でいいよ。いま、忙しいから」

土曜日という事もあり、催促の声はなかった。

「入ってくれば？」

ユミが言う。

「うん……いいよ、別に」

ボクは勉強机の椅子に腰掛ける。

「ユミは？ お風呂どうする？」

「あたしこそいいよ。プチ家出の身だし」

彼女はそう言って肩をすくめると、弱々しく笑った。

「じゃあ、夜中に入ればいいよ。みんなが寝てからさ」

父さんは十一時には寝るし、母さんも十二時前には寝室へ行っ
てテレビを点けながら寝るから、その後なら平気だと思った。

「じゃあ、夜中に入ろうかな」

ユミはボクを下から覗き込んで

「一緒に入る？」

ドキッと心臓が高鳴る。

顔が熱で犯された。

「そんな事できるか」

ボクは顔を赤くして、ぶっきら棒に応えた。

第5章 【3】水音

「トモ……トモ……」

誰かがボクの身体を揺すっていた。

聞こえる声が、ユミのものだと気付いて目を開ける。

「布団に入れば？」

いつの間にかベッドに寄りかかった状態で眠っていた。

ユミも同じだったかも。

「うん……」

ボクは少し寝ぼけて応える。

「あたし、お風呂もらってもいい？」

そうだ……夜中にユミは風呂に入るんだった。

時計に目をやると、一時になるところだった。

もちろん深夜。ちょうどいい時間かもしれない。

「あつ……そうか。いいよ。この時間なら大丈夫だ」

ユミはコクリと頷いて、小さなリュックに手をつ突っ込んだ。

「そのの筆筒にタオル入ってるから」

ボクの指差す筆筒をユミは開けて、タオルに自分の着替えの下着を包み込む。

「トモも入る？」

「いいよ、俺は」

「でも、どうせ電気は点けられないし……怖いよ」

そうか……電気か。どうしようか。

こっそり入るには電気は点けられないし、脱衣所と風呂場の電気を点けると誰かが気づいて声をかけるかもしれない。

「大丈夫だよ」

ボクは曖昧に応える。

「電気点けて平気？」

「どうだろう……」

「きっと、真っ暗だよ。トモ、一緒に入ろうよ」

ボクは妙な決断に迫られる。

「だって、見えたらどうするんだよ」

もちろん、彼女の裸の事だ。

見たい気持ちもあるけれど、ユミは見られたくないだろう……ていうか、ボクも自分の裸なんて見られたくない。

「タオル巻けば大丈夫だよ。もともと暗いんだし」

……そうか。タオルか。

自分家の風呂でタオルを巻くなんて考えもしなかったが、考えてみればそうかもしれない。

いや……ボクは再び首を振る。

「でもさ……」

ユミと一緒に同じ湯船に入るのか？

温泉の大浴場じゃあるまいし、身体が密着するじゃないか。

「だって、ウチの風呂せまいよ」

「大丈夫だってば」

時間を無駄にはしたくない。

そんな気持ちボクにもあって……結局ボクが折れる事になった。

二人で足音を忍ばせて階段を下りると風呂へ向う。

脱衣所にはドアが無くて、トイレの横にアコーデオンカーテンが取り付けてあった。

その先は洗面所と洗濯機が在る。

その脇で服を脱ぐのだ。

真っ暗だけれど、真っ暗じゃない。

暗闇に目が慣れているんだ。

「とりあえず、あっち向いて」

ユミはそう言いながら自分もボクに背をむけると、スルスルとTシャツとジーンズを脱ぐ。

何だか変な気分だ。

何処か知らない場所へ来たみたいない違和感は、暗闇のせいだろうか。それとも、背後にユミがいて、服を脱いでいるせいだろうか。背中で風呂場の扉を開ける音がした。

「トモ、早く」

彼女が催促する。

ボクたちはとりあえずお互いを見ないように、背中合わせになった状態で真っ暗な風呂場に吸い込まれるように入った。

擦りガラスの窓からは、微かに月明かりが入り込んでいる。

でもそれは、風呂場全体を照らすほどの明るさではなかった。

「トモ、お風呂のフタとか開けてよ」

そうだ。この場所に慣れた人間の方が、暗闇の中で行動し易いんだ。

ふたりは静かにしゃがんで、背中合わせのまま風呂のお湯をかける。

あれだけ強引に誘ったユミも、いざとなればヤッパリ恥ずかしいのか、動作がたどたどしい。

できるだけ音を立てないように、静かにお湯を身体にかけた。

「シャワーは？」

ボクはユミの身体越しに手を伸ばして、シャワーのヘッドを掴むと手探りで蛇口をひねる。

自分の身体の前にシャワーを持って来て、温度を確認する。

暖かいお湯が出る前に彼女にかかったら、かわいそうだから。

「ほら」

ボクはお湯が出たのを確認して、ユミにシャワーヘッドを手渡す。

その途端、彼女はボクの頭にお湯をかけた。

「うわっ」思わず小さく叫ぶ。

「なんだよ……」

「頭、洗ってあげるよ」

ユミは手探りでシャンプーを見つけて、ボクの頭にかけた。

お湯がかかった時点でボクは目を開けられなくなったから、彼女がこちらを向いても何も見えはしない。

ただ、お湯とシャンプーの香りに混じって、何時もはしない別の香りがした。

それはユミの匂いなのだろうか。

第5章 【4】虫の声

誰かと湯船に入るのは久しぶりだった。

兄貴と最後に入ったのは小学四年生の頃が最後だし、今年の春に修学旅行で友達と入ったのは、旅館の大浴場だ。

家の浴槽は思った以上に狭かった。

「入るよ」

先に湯船に浸かったボクに、ユミは言った。

ボクは身体をひねって視線を大げさに逸らすと

「うん……」

浴槽の縁を跨ぐ彼女の姿は、絶対に見てはいけなような気がしたんだ。

「イテッ」

最初にお湯に突っ込んだユミの左脚が、ボクの脇腹に当たる。

「ごめえん」

彼女は浴槽に浸かりながら、ボクの脇柄を摩ろうとした。

素肌同士があまりに密着するから、ボクは浴槽の角にへばり着く。彼女は平気なのだろうか……。

湯気に煽られるユミの匂いは、やっぱりこの家の誰のものでもない。

「なんか、ちょっと楽しいね」

彼女が肩をすくめて笑うのが、視界の隅に見えた。

「もうこっち見て大丈夫だよ」

そんなこと判ってるけど、その身体に巻いたタオルの下が裸だと思つとちよつと……。

ていうか、タオルが身体にピタリと張り付いて生々しいんだつて。ボクは足を閉じて、ユミの身体の横に滑り込ませる。

ユミの足も、ボクのお尻の横に滑り込んできた。

それでもボクは彼女を真っ直ぐには見れず、月影が照らす擦りガ

ラスの窓を見上げた。

「誰か風呂に入ってるのか？」

脱衣所のアコーディオンカーテンの開く音がした。

全開ではなく、少しだけ開いた音だ。

声は父さんだ。トイレにでも起きて、物音に気付いたのか？

ボクはユミと一緒に息を潜める。

心臓がバクバクした……どうしようか……。

「俺、うたた寝して今起きたんだ」

「電気点かないのか？」

「ち、ちがうよ。ちよっと理科の実験してるんだ……だから、電気は点けないで」

「ああ、そうか。ならいいけど。見えるのか？」

「少しね。大丈夫だよ」

「それならいいけど」

アコーディオンの閉まる音がした。

ていうか、理科の実験でなんだよ……。

ユミは声押し殺すように、クスクスと笑いを堪えていた。

「理科の実験って何よ？」

声を潜めて言う。

ボクは顔を背けたまま、彼女の脇腹を指で突いた。

彼女はさすがにビクリと身体をずらすと

「スケベ」

遠くの夜気には、消防車のサイレンが揺れるようにやたらと響いていた。

薄闇の脱衣所で服を着たボクたちは、静かに息を潜めて階段を上

った。

二階のトイレの流れる音を聞いて、慌てて部屋の中へ滑り込む。薄闇に慣れたボクたちは、一瞬電気を点けるのを忘れてベッドの上に腰掛けた。

「ていうか、暗くない？」ユミが声を潜めて笑う。

それで気付いたボクは、慌てて電気のスイッチを入れる。

「なんかヤラシイ事されるかと思った」

「ばあか。そんな事するか」

懐かしさが滲む明かりの下で、ユミはちよっぴり淋しそうに笑った。

その表情の意味が判らない……。

ボクは押入れを開けて、予備の布団を敷こうとした。

「面倒だから、一緒に寝る？」

ユミが床にペタリと座ったまま、ボクを見上げる。

「はあ？」

ボクの表情を楽しむ彼女は

「あたし、床でいいよ。ていうか、暑いから布団いらないよ」

ボクは黙って、タオルケットだけは取り出す。

まあいい。ボクがカーペットの上に寝て、ユミをベッドに寝かせれば。

気がつけば、ユミはベッドの上に横たわって仔犬のように眠りに入っていた。

ボクは少しだけ顔を近づけて、その安らいだ寝顔を見つめる。

窓から入る夏の夜風に、虫の声が溶け混むように流れ込んできた。

第5章 【5】呼び声

夏休みの間には、登校日という面倒なものがある。

まあ、ボクは毎日水泳部の練習で学校へ通っているけれど、やっぱり教室の机の席に座るのは野暮ったい。

八月九日。

学校へ行くと、昇降口でサトシに合った。

夏休みに入って、一度遊んだきりだったから、なんだかすごく久しぶりだ。

「トモ、千春の家……火事で焼けたって……」

サトシは開口一番そう言う

「知ってたか？」

初耳だった。

千春は五年生の時に新しい家に引っ越してしまい、ボクの家から少し離れてしまった。

その新しい家が、火事でほぼ全焼したと言う。

彼女とはクラスが離れてからほとんど、いや……全く会話を交わしていない。

「千春は？」

「知らない。学校来てないんじゃない」

サトシの言うとおり、朝礼でも千春の姿は見当たらなかった。体育館から教室へ戻る時、二組の教室を覗く。

「おう、トモ。どうした？ 誰か探してる？」

ゴツちゃんが振り返って声をかけてきた。

「いや……ちよつと」

ボクは千春の事を言い出せない。

視線を教室に巡らせると、数人がこっちを見ていた。

ボクは直ぐに踵を返して自分の教室へ戻る。

やはり千春の姿は無かった。

ホームルームでは、担任教師からこの学校の生徒の家が火事で焼けてしまった事だけ話があった。

みんなも噂で千春の家だと知っているが、誰も突っ込んだ質問はしない。

結局ボクも、何も訊かないまま放課後の部活に向かった。

明日は市民水泳大会だ。

朝から気温は30度を越えていた。

家並の向こうから大きな入道雲が天高く立ち昇る。

一度学校へ行ってから、マイクロバスで会場の市民プールへ向った。

ボクたちにとっての一大イベントだけに、誰もが浮かれ、緊張にこわばった笑顔を見せる。

「トモ、今年は優勝しろよ」

隣のクラスの信彦が言う。

去年から水泳部で一緒の彼は、意外と仲がいいのだけれど……何でかプール以外では一緒にいる事はない。

ボクは信彦が差し出したうまい棒の封を切りながら頷いて見せた。

塩カルの二オイが漂う場所は慣れているはずなのに、やっぱりこの会場は特別だ。

25メートルプールと50メートルプールが並んだ大きな敷地は、緊張を誘発させるには充分だ。

見物のお客は去年より多いような気がする。

25メートルプールの周辺は小さな人混みが塊となって、あちらこちらに散らばっている。

ボクは施設されたテントに入って荷物を下ろすと、バックの上にバスタオルをかけた。

「朋也くん、誰か呼んでる」

女子自由形選手の美香子が背中から声をかけてくる。

ボクは怪訝な顔で振り返った。

「外のシャワーの所で」

美香子は、50メートルプールとこの25メートルプールの間に設置された外シャワーの在る水道場を指差す。

ボクは首を伸ばしてその方向を見るが、後に立つ人混みで何も見えない。

仕方が無いから立ち上がって、人を掻き分けるようにしてその外へ出た。

確かに誰かが立っている。

大きなつばの帽子を被った、ワンピース姿の人だ。

陽射しに煽られたコンクリートに立つ人影は、陽炎に揺れていた。ボクは一瞬ヨウコさんだと思った。

ゆっくりと水道場に近づくと、その人が誰なのかが明らかになる。

「久しぶりだね」

未だに少しおかしいイントネーションは、やっぱり治らないのだろっ。

でも、ボクはその喋り方が好きだ。

「うん……」

ボクは千春の目の前で立ち止まると、小さく頷いた。

黄緑色のワンピースが、若葉のように夏風に揺れている。

彼女は大きなつばの黒い帽子を被って、見知らぬ少女のような笑顔でボクを見つめた。

「転校する事になったから」

「転校？」

「ウチの事、聞いてるでしょ？」

「火事……？」

ボクはあまり口を動かさずに応える。

「ずっといるね。今日」

千春は懐かしい笑顔を見せる。

瀟洒な館で飼われているネコのような、限られた人へのみ向けられる人懐っこい瞳。

「引越しは？」

千春は応えなかった。

その代わりに「呼んでるよ」

ボクの後を小さく指差す。

開会式が始まるために、仲間が呼んでいた。
時間が欲しい時に限って、時間は無い。

「夕方、ウチの前の駅で」

ボクは彼女にそう言って、駆け出す。

千春が頷いたかはわからない。

黒い大きな帽子のつばが影を作り出して、彼女の表情はもう見えなかった。

第5章 【5】呼び声（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
のんびり連載してきたこの作品……。
おそらく次回が最終話です。

第5章 【6】夕凧（前書き）

最終話です。

しゅっくりしゅっ覧下さい。

第5章 【6】夕凧

ボクは水泳大会で優勝した。

自由形100メートル小学生の部で、1位の表彰台に昇った。

その後の団体メドレーで50メートル自由形を担当した競技も、同じく1位でフィニッシュする事が出来た。

ボクは2枚の賞状を手に、広いプールサイドを歩き回った。

もちろん千春を探していたんだ。

でも彼女の姿は見つからなかった。

マイクロバスで学校へ戻り、小さな打ち上げの食事会があった。体育館で一人ずつに小さなお寿司の鉢が配られて、何だか気だるい気持ちでそれを頼張る。

女の子達は意外と元気で、男連中は静かだった。

学校を出たのは四時をまわっていて、ボクは家に着くと親に声もかけずに外へ出た。

千春は何処で暮らしているんだろう。

何処かのアパートに入っているのだろうか。

だったら別に転校なんてする必要ないのに……。

子供のボクに、その事情の詳細は判らなかった。

やっぱり、世間体が彼女の家族をこの地から遠ざけようとしていたのかもしれない。

ボクは引込み線の古い線路に腰掛けたまま、コーラを飲み干して時間を持て余していた。

古びたコンクリートの駅のホーム。

後ろ側は、石で引つかいて書いた落書きで埋め尽くされている。誰かの悪口。学校の先生の悪口。

女の子の名前。男子の名前。

そして、二人の男女の名前を囲んだハートマーク。

あいあい傘……。

ボクは暇に任せて、くまなくそのいたずら書きを眺めていた。中には知っている教師の名前の後に「死ね」とか書いてある。

三、四年生の時に同じクラスだった娘の名前が、遠慮気味に小さく薄い引っかき傷で書いてあった。

何時の間に、誰がこんなに書いているんだろうか……。

ボクは場所を移動しながら、落書きを眺めた。

ホームの端まで来た時、ボクの視線は止まった。

『バイバイ、TOMO』

それが千春の字かどうかは解らないけれど、まだ新しい引っかき傷なのは確かだった。

ボクはその傷跡に手を触れる。

彼女の心を感じる事は出来ない。

空は緋色に変わり、気がつけば西の空が焼けるように紅く染まっていた。

水あめのように透き通ったオレンジ色の雲が、遠くに波間を作っている。

ボクは再び落書きを見つめた。

『バイバイ、TOMO』

心の中で、「バイバイ」と呟く。

その日、千春は来なかった。

いや。ボクより先にここへ来たのかもしれない。

解っているのは、もう彼女に逢う事はないという事実だった。

近くの踏み切りが、不意に鳴った。

振り返ると、小さく見える踏切の赤いランプが、夕間暮れの中でキラキラと点滅している。

電車の時間ではない。

普通は上りが毎時間五分と四十分。下りが十一分と五十五分だ。夕方のラッシュ時間でも、この時間に電車は無いはずだ。

蒸気の音が聞こえた。

ボクは夕陽に染まる景色を見つめる。

緩いカーブの向こうから、白い煙が見えた。

車輪を回す機械的な轟音が響く。

駅のホームを挟んで目の前を機関車が通り過ぎてゆく。

相変わらず客車は引いていない。

駅を抜けた機関車は、木々の合間を縫う様に夕闇に背を向けて走り去る。

草原を駆け抜ける機関車の煙を、ボクは消えるまで何時までも見つめていた。

ゆったりと尾をひいた白い煙は、ゆらゆらと空へ上りながら霞んで夕映えに溶け込んだ。

それは、ボクが観た蒸気機関車の走る、最後の姿だった。

ヒグラシの声だけが夕凧の景色の中に染み渡り、まだ早い夏の終わりを告げようと辺りに響いていた。

.....

大人は忙しい。

会社などに属する日々は想像以上に忙しくて、遠い昔を振り返る暇などなかった。

今年、地元をS1が走るらしく、街角で宣伝ポスターを見かけた。あの頃見た、C62だった。

不意に頭を過ったのは、けたたましい蒸気の圧縮される音となだれ込むような蝉の声……。

そしてあの頃出逢った彼女たちの姿だった。

もうオバサンになっている彼女達は、どこかで元気にしているの
だろうか。

END

第5章 【6】夕凧（後書き）

最後までお読み頂き有難う御座います。

このお話は、別になにかメッセージ性を含んではいけません。
過ぎ去った遠い夏の思い出が蘇える……。

そんな雰囲気味わってもらえたなら、それでいいのです。
有難う御座いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8784e/>

夕風にヒグラシ

2010年10月8日15時59分発行